



# 第6回ESD大賞 受賞校実践集

主 催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

後 援：文部科学省 / 日本ユネスコ国内委員会 / 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 / 株式会社教育新聞社

## はじめに

Education for Sustainable Development (ESD) は、「持続可能な社会の担い手を育む」教育とされています。

地球上の様々な課題を、自分たちに関係のある事としてとらえ、『持続可能な社会』を目指して、身近なところから課題解決に取り組もうとする人材を育成し、意識と行動を変革することを目指す教育です。

NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、このESDの理念に基づく取組を積極的に実践する学校を奨励する「ESD大賞」を平成22年度に創設いたしました。

本事業は、全国のESDの優れた実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与することを目指しております。

6回目となる今年は昨年に引き続き「文部科学大臣賞」が設けられ、全国の小・中・高等学校61校よりご応募をいただきました。

多くの優れた実践から受賞校を決定することは困難ではございましたが、第6回ESD大賞として、ここに受賞校を発表し、その実践をまとめさせていただきました。

なお本冊子におきましては、自社の知見や技術を生かし、日頃からESDの推進をサポートする企業の社会貢献活動事例もご紹介させていただきます。

本冊子が少しでもESD実践の参考・発展へつながら、持続可能な社会の担い手づくりに寄与できれば幸いです。

# 目 次

◆はじめに .....	1
◆審査にあたって .....	3
◆講評 .....	4
◆文部科学大臣賞	
東京都大田区立大森第六中学校 .....	5
◆ユネスコスクール最優秀賞	
山口県立周防大島高等学校 .....	10
◆小学校賞	
神奈川県横浜市立永田台小学校 .....	15
◆中学校賞	
福井県勝山市立勝山北部中学校 .....	20
◆高等学校賞	
北海道留辺蘂高等学校 .....	25
◆審査委員特別賞	
東京都多摩市立東愛宕中学校 .....	30
◆ネスレ日本ヘルシーキッズ賞	
埼玉県川口市立芝富士小学校 .....	35
北海道室蘭市立本室蘭小学校 .....	40
◆企業の社会貢献活動事例	
ネスレ日本株式会社 .....	45
◆NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムについて .....	48

## 【審査にあたって】

第6回ESD大賞の審査にあたっては、「はじめに」で示したESD大賞のねらいとESDの目標である「持続可能な社会づくりにかかわる課題を見出し、それらを解決するために必要な能力や態度を身につけることを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うこと」に基づき、審査を行いました。

加えて、

- ・学校全体として、組織的・計画的な取組となっている。
- ・指導内容・方法等に関して工夫改善された新しい提言が行われている。
- ・他の学校の参考となる。

などの観点も重視されています。

また昨年度に引き続き、企業特別賞である「ネスレ日本ヘルシーキッズ賞」を設定しました。本賞では、ESD大賞の審査基準を満たした小学校の事例のうち、特に次の4つの観点から、子どもの意識・行動変容につながっている優れた事例に対して、賞を贈ります。

- ① 「からだづくり」に前向きな子どもを育てている
- ② 仲間と共に行動することで喜びや楽しさを分かち合うことができる
- ③ 「社会性」や「対人関係能力」、「他者への思いやり」を育てる
- ④ 子どもの自尊感情、自己肯定感を高める

本賞は、「自分のからだは自分でつくる」をコンセプトに、次世代を担う子どもの健康づくりをサポートするネスレ日本株式会社の特別協賛により設定されています。

なお、賞から外れた学校にも優れた取組が多くありました。各学校におきましては今後一層精進され、ESDの発展・充実に向けた取組となることを期待しています。

文部科学大臣賞 … 東京都大田区立大森第六中学校

「思考力」「コミュニケーション能力」「ESDで育てる態度」の三つの分科会を設けて各教科等の授業改善に努めている。ESDを核として日常の授業の工夫改善に取り組み、その成果をあげている点が高く評価された。授業の改善には、ポートフォリオを取り入れ、生徒の変容をとらえている。地域と連携したホタルの飼育、江戸伝統野菜の栽培、駅前花壇のメンテナンスなどの環境教育にも長年取り組み、成果をあげている。

ユネスコスクール最優秀賞 … 山口県立周防大島高等学校

少子高齢化・人口減少が進行する地域の課題の探究とともに地域への貢献活動として、未来をひらき、それを支える若い世代の育成を全校あげて取り組んでいる。「福祉」と「ビジネス」の二つのコースによる「地域創生科」という新しい科目を設け、学校として組織的・計画的に展開している点が高く評価された。ふるさとへの誇りと愛着を育む教育活動で、生徒は自分たちに出来ることを、さらに地域からの期待を実感し、自己肯定感・有用性の高まりを見せている。

小学校賞 … 神奈川県横浜市立永田台小学校

昨年のユネスコスクール岡山宣言にある「ユネスコスクールとしての誇りと自信をもって学校教育の推進を図るホールスクール・アプローチ」に基づき、研究テーマは「『もみじアプローチ』で変容し続ける学校」としている。木々のもみじが色づくように持続可能性の教育が学校の教育活動全体に行き渡ることを願った取組である。「もみじアプローチ」によって、教師が変容し、それが子供の変容、さらに学校と地域の変容をもたらすなどの取組が評価された。

中学校賞 … 福井県勝山市立勝山北部中学校

中学生からの地方創生、提言、環境教育、キャリア教育等を実践へのキーワードとしている。ふるさとを見つめ直す体験を通して、「大人になっても勝山に住みたい」「活動の成果を大人になって見届けたい」と考える生徒が増えている。さらに、町のゴミを減らす、外来種を減らすなど地域と結びついた体験を伴う活動が、地域を変える上で大きな力となっており、中学生による地域活性の取組が評価された。

高等学校賞 … 北海道留辺蘂高等学校

生徒が社会で自立し、共生できる力を育むことをねらいとし、人間関係形成・社会形成能力、自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力等を育む実践に取り組む。総合学科高校の特色を生かして、キャリア教育に基づくESDの全体計画を立てたり、ESDによる特設科目「自然環境研究」を設けたり、学習評価にはESDで求められる能力に配慮するなど、ESDによって教育全体の改善・充実に努めていることが評価された。

審査委員特別賞 … 東京都多摩市立東愛宕中学校

ESDを柱とし地域との連携による学校教育に長年取り組み、生徒の主体的な学び、協同的な学びなどESDの趣旨に沿った活動が展開されている。防災・減災キャンプの実施、グリーンカーテンの作成、地域の伝統行事への参画、難民支援などESDに沿った多様な教育活動によって生徒の主体性が生まれ、学校運営の改善充実が図られたことが評価された。

ネスレ日本ヘルシーキッズ賞 … 北海道室蘭市立本室蘭小学校

学校経営の重点である「丈夫な身体づくりを基本に置いた『健康・安全』の充実」の具体化に向けて多様な活動に取り組む。子供たちは食べ物を大切に作る心や自主的に身体を鍛える態度を身につけ、さらに、保護者への啓発活動で朝食摂取はほぼ100%を達成している。また、「残すことはもったいない」という意識を定着させるなどの活動が評価された。

ネスレ日本ヘルシーキッズ賞 … 埼玉県川口市立芝富士小学校

中高学年を対象とした栄養教諭による食指導とともに生活科、学級活動、特別活動など様々な学習場面で食の指導を展開している。子供たちの合言葉は「芝富士小の給食は世界一」で、毎日残滓ゼロを実践している。食の指導とともに運動の大切さについても、「からだづくり」の教育活動が組織的・計画的に実践されていることが評価された。

東京都大田区立大森第六中学校

教諭 柴崎 裕子

「ESDの推進及び授業改善」～未来につなぐ地域連携教育～

ユネスコスクール加盟から6年

平成22・23年度に大田区教育委員会研究推進発表校として、「夢と希望を叶える課題解決能力」をテーマに、研究を始めた。その際に出会ったものが、持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development以降ESD)である。



本校は、東京都大田区の住宅地にあり、古くは日蓮上人が袈裟をかけた松、また江戸の浮世絵師歌川広重が江戸百景に描いた洗足池に隣接する。この風景に魅了された勝海舟が別邸を立て、その跡地に本校が建てられた。都内では有数の風致地区で家庭環境も教育熱心な家庭が多い。「学び」に関する意欲は生徒・保護者ともに高い。しかし、それは進学に向けたものであり、何のために学ぶのかという問いには答えられない。将来の夢をもち、その実現に向けて努力することよりも、どの高等学校へ進学できるかということに関心があり、塾への依存も強く学校で学ぶ意義を見いだせない生徒もいる。意識調査を見ると、学習計画を立てて自ら学習しようという意欲が不足しており、家庭学習の定着度も高くはなかった。

特別活動においては、伝統ある学校行事があり全校で意欲的に取り組んでいる。実行委員会組織を立ち上げ、自主的に企画運営をすることができる。しかし、生徒会執行部を中心とした日常の委員会活動は形骸化し、積極的に活動しているとはいえない状況もあった。地域清掃等の活動に参加するのも、一部の生徒会役員を中心とした生徒に支えられていた。地域の一員としての意識は薄く、地域への愛着や貢献したいという思いは低いと考えられた。地域の方とあいさつを交わす姿もあまり見られなかった。

本校生徒の課題として、生活経験の不足によるコミュニケーションや言語活動の未熟さ、ものづくりや表現力・創造力の未熟、さらに論理性不足等が考えられた。このような実態をふまえ、将来にわたって夢や希望をもち、自己の生き方やあり方を考え、多様化する社会に対応し貢献しようとする生徒を育成するためには、「課題解決能力」が必要であると考えた。

本研究では、「課題解決能力」を次のようにとらえた。

**「課題解決能力」とは、「学校や教室での学習(学校知)にとどまらず、社会に出ても生涯にわたって学習する(自己実現のための課題解決・意欲)ことの大切さを学ぶ能力」である。**

「学習の過程と求める能力・態度」は、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、問題を解決する資質や能力」である。

そこで、「地域は屋根のない学校」という理念の下、環境教育、防災教育、国際理解教育などの教育活動を推進した。

22・23年度における研究の成果としてまず、行事や委員会などでの生徒の取組が活発になったことがあげられる。取組の前に自分個人やクラスの課題を設定し、その解決のために具体的に何を実行したらよいかというプロセスを踏むことにより、一つ一つの課題を解決していけば大きな成果につながり、達成感が得られることを生徒は実感するようになった。この達成感は自信につながり、また次の取組にも生きてくる。また学校生活のなかで、生徒自ら問題点を考え、解決に向けてできることを自分たちで取り組む姿勢ができあがった。生徒会の呼びかけに対し、省エネのためのグリーンカーテンや東日本大震災後、花巻への応援メッセージの作成など、各クラスで生徒全員が取り組むことができるようになった。各委員会でも、それぞれ問題点を解決するため



に対策を委員会で話し合っただけでなく、取り組むことが増えた。このことは、自分たちの所属する社会を自分たちの手で、より良くしていこうという大きな力になった。この力は、自分たちの所属する社会だけでなく、世界に目を向けたときにも、自分たちができることを実践していこうという行動力にもなった。

次に、ボランティア活動が活発になったことがあげられる。挨拶運動などの校内の活動から、地域清掃、ホテルの再生プロジェクト、農援隊などの地域の活動へ、また人数的にも広がりを見せている。昨年9月と今年4月に行った生活アンケートでも「人が困っているときは、進んで助けますか」「人の役に立ちたいと思いますか」「人の気持ちがわかる人になりたいですか」の項目で、「そう思う」と答えた生徒の数が増えていることから生徒の意識の変化が見られる。ひとりひとりが、自分たちでできることをしていこうという気持ちを持ち、それが誰かのためになるだけでなく、自分のためにもなることを生徒は知るようになってきた。

学習面では、コミュニケーション、言語活動、ものづくり、芸術・表現、論理的思考の分科会に分かれ、それぞれが課題解決能力を育成するための方法を検討し、授業の中で実践することができた。研究授業や、お互いの授業観察を通し、試行錯誤ではあったがさまざまな授業の中での工夫が実践されたと思う。班での話し合いの仕方、自己評価カード、スモールステップの実践、ワークシートや課題項目のチェックシートなどの新しい工夫が取り入れられた。小さな積み重ねではあるが、教員が意識して授業に取り組むことは意義があった。

生徒の視野が広がったことも成果の一つである。これは「すべての教室に新聞を」の取組で、毎日2紙の新聞が教室に配布され、その日のニュースで気になる記事を担当者が発表したり、廊下に記事を掲示して関心を持たせたり、クラスでスクラップブックを作成したり有効活用した成果である。生活アンケートでも「新聞やテレビのニュースなどに関心がありますか」の項目の数字が昨年よりも高くなっている。視野が広がり、社会に目が向けられるようになるということは、社会のさまざまな問題に目を

向けることにつながる。

### さらなるステージへ

平成26・27年度大田区教育委員会教育研究推進校としての研究の機会をいただき、さらに、平成27・28年度国立教育政策研究所 教育課程 ESD研究指定校としての役割も与えていただくことになり、これまでの研究を改めて見直す機会となった。

平成24年3月に国立教育政策研究所より発行された「学校における持続可能な開発のための教育(ESD)に関する研究最終報告書」でESDに関する構成概念として、人を取り巻く環境に関する概念を①多様性、②相互性、③有限性とし、人の意志・行動に関する概念を④公平性、⑤連携性、⑥責任性、をあげ、持続可能な社会づくりの明確な提案があった。

さらに、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度として①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的・総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力、⑤他者と協力する態度、⑥つながりを尊重する態度、⑦進んで参加する態度、を挙げている。これらの力や態度が授業研究として具体的に組み込むことができた。

そこで、研究主題として、「ESDの推進及び授業改善」とした。



まず学校内研究組織を再構築することで、校内研究意欲を高めることとした。もともと研究組織はあったものの一部のみが実働している実態を踏まえ、管理職、研究主任、主幹教諭で組織した研究推進委員会を週に1回時間割に組み込むことで、校内全体の研究を活性化させることができた。さらに、月1回の校内研修会では、研究授業を行った後、講師の先生を招き協議会を開いた。

校内研修では、常に全教科の教員が3分科会に

分かれ研修を進めてきた。生徒に身につけさせたい力や態度を育てるために年度初めに教師向けアンケートを取り、7つのESDで身につけさせたい能力・態度を集約し、3つに分類し、分科会のテーマとした。

ESDの視点に立った学習指導で重視する7つの能力・態度を検討し、「批判的に考える力」、「未来を予測して計画を立てる力」、「多面的総合的に考える力」を身につけるためには、**思考力**を育てなければならない。また、「批判的に考える力」、「未来を予測して計画を立てる力」、「多面的総合的に考える力」との関連を図ることで、「コミュニケーションを行う力」は高まると考える。さらに「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」は、持続可能な社会の担い手として必要である。



そこで、「思考力分科会」「コミュニケーション分科会」「ESDの態度分科会」と名づけ、研修を進めた。

また、指導方法として、アクティブラーニングを取り入れ、授業を展開することにした。

次期学習指導要領では、育成すべき資質・能力について

「知識・技能」

「思考力・判断力・表現力 等」

「主体的に学習に取り組む態度」

の3要素を出発点として、3つの柱で整理していくことになると思われる。

①「何を知っているか、何ができるか」

(個別の知識・技能)

②「知っていること・できることをどう使うか」

(思考力・判断力・表現力等)

③「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか(人間性や学びに向かう力等)」

そこで、学習活動の示し方や意義等が、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びいわゆる「アクティブ・ラーニング」の手法にある。

学び全体の改善として、

I Process (プロセス)

習得・活用・探究という学習プロセスのなかで問題発見・解決を念頭に置きつつ、深い学びの過程が実現できているかどうか。

上記①～③に示す力が総合的に活用・発揮される場が設定されることが重要である。

II Interactive (相互交流)

他者との協働や外界の情報との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか多様な表現を通じて、教師と生徒、生徒と生徒が対話し、それによって思考を広げ深める。

III Reflection (省察)

子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。IからIIIの要素を授業に組み入れていくことで、授業が改善され、「思考力」「コミュニケーション」「ESDで育てる態度」を育てることにつながることを考えた。

さらに、授業の始めにどのような課題を生徒に持たせるかが重要で、課題設定、あるいは生徒に投げかける問いを工夫することが、授業改善の鍵になった。

【思考力分科会】

本分科会では、思考力を以下の3つの力に分類してみた。

①「批判的に考える力」：課題解決の方法は、一つだけではないことを意識し、他者の考え(解決法)や、自分の考え(解決法)を協働して吟味し、より良い解決法を見いだしていく力

②「未来像を予想して計画を立てる力」：より良い未来像(課題の解決結果)を共有化し、それに向けて、どのようなスキル、ステップが必要かを考え実行していく力

③「多面的、総合的に考える力」：情報を他者と共有しながら、互いの考え方の共通点や、相違

点を理解し、共感したり、統合したりしながら課題を解決する力

3つの「考える力」を生徒につけさせていく上で、重要なポイントは以下の3点であると考えられる。

・その授業において、どの力を伸ばすことをねらいとしているのかを明確にすること。

・そのねらいに適した授業形態を研究すること。特に、アクティブラーニングに積極的に取り組むこと。

・どのような授業形態をとる場合でも、ESDで重視する態度（他者との協働、つながりの尊重、主体的な参加）が意識され、生徒が主体的に学ぶ授業づくりが行われていなければならないこと。

### 「コミュニケーション分科会」

研究対象を、次の5つの能力と考えた。

①発想力・・・課題に対し自分の考えを持ち、伝えたいことをしっかり持つ。

②論理力・・・相手に自分の考えをしっかりと伝えるために、根拠を示しながら相手に伝わるような言葉や態度で表現する。

③聞く力・・・相手の意見をしっかりと聞き取り、相手の言いたいことを認める。

④批判的思考力・・・相手の意見を聞き、それをもとにさらに自分の意見を構築する。

⑤コミュニケーションを行う力・・・①～④の力を駆使し、相手が誰であろうと自分の意見を伝え、相手の意見を聞き、やりとりができる。

コミュニケーション分科会ではこれらの能力を授業の中で育てていくための方策を探ってきた。課題解決のためにコミュニケーションを使う機会や活動を授業の中に意図的・計画的に設定する必要がある。5つの力を育てるためには様々な形態で取り組むことが有効であると考えた。例えば、話し合い、討論会、ディベート、ゲーム、スピーチ発表、ペア活動、グループディスカッションなどである。そして、これらを授業の中で取り入れ、お互いの授業を見て、振り返りを行ってきた。コミュニケーションという共通の視点があることで、教科を超えてお互い意見を出すことでより良い方法を見つけることもできた。

### 「ESDで育てる態度分科会」

ユネスコスクールとして、ESDで育む態度を「平和」を中心にとらえさせた。各教科内で「平和」を扱う単元をクロスカリキュラム表にまとめた。平和をテーマに扱う教科単元は、数多くあるが、実際に「平和」を扱っていく方法として、教科を超えた「横断的学習」を実践していくことが有効ではないかと考え、研究授業も行い、良い成果を上げることもできた。

「ESDで育てる態度分科会」では、教員メンバーによるそれぞれの担当教科のカリキュラムについての「話し合い」の時間を積極的にとり、教科間の関連を生みやすい内容に関しては、物理的、時間的に同じ教室に教師がいなくても、限りなく「横断的学習」に近い授業が実践できるような試みを実践した。そのために、クロスカリキュラム表は有効であると考えられた。

また、生徒は平和を考える際に、戦争と関連付けやすいので、身近な問題からも考えたり、さまざまなアプローチを考えることができるようにするためにも、クロスカリキュラム表は有効であると考えた。

### 分科会の成果と課題

これまでの取組の成果として次のようなことが挙げられる。

①1時間ごとの学習課題の明確化

課題解決型の学習を進めていくにあたって、毎時間の学習課題を明確にした授業を行ってきた。これによって、生徒の意識も、単なる知識の獲得から授業における課題解決へと変化しつつある。

②学習形態の多様化－生徒同士の学び合い

話し合い活動などの協働学習を重視した取組がなされることにより、教師からの一方的な知識の伝達ではない、生徒同士の学び合いの場面が多く見られるようになった。

③考え（予測し）やってみてまた考える

特に実技教科において、言われたことをやってみ

るのではなく、「こうしたらどんな結果が得られるか」を考えてから実技を行う授業の展開ができてきた。



④発想力・批判的思考力の向上

他者の意見を参考にさらに自分の意見を振り返り、共感したり批判したりしながら考えを深めることができるようになった。

⑤表現力の向上

分科会の中でいくつかの教科でコミュニケーションを積極的に行う授業を行い、他の教科でその力を活かすことができた。よい発表はクラス全体の表現力を向上させることができる。

⑥人間関係の構築

どのようなグループでも話し合い活動ができるようになった。司会、リーダーを決めなくても、さまざまな人数のグループでもスムーズに話し合いをすることができる。コミュニケーションをとる活動することで相手を尊重することができ、より良い人間関係を作ることができるようになった。

⑦自己肯定感・達成感

課題に対しコミュニケーションをとることで自分の考えを深め、さらにそれを表現できることで自己肯定感が高まり、達成感を感じることができるようになった。また自分の意見が他者に認められると自信になり、さらに堂々と意見を言えるようになった。

⑧ESDの視点を導入した成果

話し合い活動の手法を用いたことによって、「進んで参加する態度」で授業に参加する生徒は多く見られた。また、話し合いで出た意見のなかには「他者と協力する態度」や「つながりを尊重する態度」を取り入れて考えられている内容のものもあり、それらの意見を共有することもできた。

### 「ESDの評価」

授業の中で生徒をどう評価していくか。生徒の変容を見るために、全校生徒にアンケートをとり、各授業でポートフォリオを進めた。

アンケートではESDで構築される概念形成を中心に聞いた。アンケート20項目中、13項目において肯

定的割合が80%を超えた。

各授業でポートフォリオしていく中で、自分の考えが、「自分の中ではわかっているけど。」・「自分の意見を言うことができた。」・「ヒトの意見を聞きいろいろな考えがあることがわかった。」・「もっと勉強してみたい。」と、変化していく様子が見えてきた。

自分の意見を持ち、相手の言うことを理解し、未来を予測し、さらに考えを深め、自分の意見を相手に伝える。この段階を全ての授業で進めていると、生徒の力は大きく向上し、人前で自分の意見を発表することが抵抗なくできるようになってきている。

### 最後に

これまでの研究の中で、ユネスコの理念に沿った教育が、確実に人格を育て、また、学力向上につながっていると思われる。

持続可能な社会の担い手づくりを意識して行ってきたこの5年間で生徒は、地域を大切に思い、世界のことを考え、実行できる生徒に成長してきていると考える。

OECDが発表した、キーコンピテンシーにおいてもESDが提唱する7つの力と態度が重要であることがわかる。

ESDが特別なことをしているわけではない。本来の知識や技能をしっかりと身につける。その上で、能動的に主体的に思考を深め、表現力を高め、正しい判断をしていくことが、今後の社会を担う人として求められている。さらに、欠かせないことは、思いやりをもち、進んで行う態度、つながりを尊重する態度を培うことが、持続可能な社会の担い手として絶対的に必要であることを確信している。



## ユネスコスクール最優秀賞

山口県立周防大島高等学校  
教諭 芝山 勝

### 1. 周防大島について

本校がある周防大島は、山口県南東部に位置する、瀬戸内海で3番目の面積を有する自然豊かな島で、本土とは1976年に開通した全長約1kmの大島大橋によって結ばれている。年間を通した平均気温が15.5℃と比較的温暖なため、「瀬戸内のハワイ」とも呼ばれ、みかんを中心とした農業をはじめ、観光、漁業を主な産業としている。

一方で、人口減少・少子高齢化が急速に進んでおり、終戦後60,000人を超えていた人口は、現在では17,000人ほどに減少し、高齢化率も50%を超えている。中でも、若年層の流出が深刻化しており、島で生まれ育った子供たちが進学や就職で島外へ流出したまま帰ってこないことは、「一人暮らし高齢者」の増加という状況を招き、地域社会のバランスが大きく崩れ始めている。

この傾向は、近い将来、都市部を離れた日本各地の他の自治体でも十分起こり得るものであり、一足先にこの問題に直面しているここ周防大島では、急速な超高齢化の進展に的確に対応し、若年層の島離れに歯止めをかけるとともに、誰もが住みよい周防大島を目指して、様々な立場から取組が進められている。それらは同時にこの周防大島高校のミッションでもある。

こうした中、周防大島の風土に惹かれたJTターナーが増加する傾向もみられ、2012、13年と、2年連続で転入者数が転出者数を上回る「社会増」という現象が起きるなど、全国的にも注目を浴びている島でもある。

本校を取り巻く周防大島の豊かな自然については、全国移住ナビ動画コンテストで全国1位に輝き、総務大臣賞を受賞した町定住促進協議会作成の動画「回帰」を是非ご覧いただきたい。

(検索：島暮らし 周防大島町定住促進協議会)

### 2. 周防大島高校について

本校は2007年に島内にあった2つの高校が再編統合されて開校した新しい学校である。

本校教育の大きな特徴として、地域の実態を踏まえながら、生徒一人ひとりにきめ細かく対応することを目的として開設・実施している、「連携型中高一貫教育」(2001年度開始)と地域創生科などの「特色ある学科・コース」(2014年度改編・生徒の全国募集開始)があげられる。

また、県内の公立高校として初めて認証されたユネスコスクール(2015年度認証)であることも大きな特徴であり、これらの教育システムを生かしながら教育活動の充実に取り組み、今年度はESD大賞ユネスコスクール最優秀賞とともに、キャリア教育優良学校文部科学大臣表彰を受賞した。

#### (1) 連携型中高一貫教育

町内の中学校(4中学校)と連携し、「地域の生徒を地域で育てる」という推進目標の下、中高の教員による交流授業の実施や「総合的な学習の時間」における郷土に関する学習の接続などの6年間を見通した教育活動の展開、ふれあいみかん収穫作業などの異年齢集団による様々な活動を通して、社会性や豊かな人間性を育成している。



<ふれあいみかん収穫作業>

#### (2) 特色ある学科・コース

本校教育の大きな特徴の一つである地域創生科の詳細については後述することとして、ここでは、

地域創生科の設置にあわせて大幅に見直した普通科のコース編成や教育内容について紹介したい。

本校が、島唯一の高校として地域の期待に応えるためには、生徒の幅広い学力に的確に対応しながら、多様な希望進路の実現に向けたきめ細かな教育を展開していく必要がある。



このため、普通科では、7限授業(週4日)や課外授業、学習合宿、徹底した個別指導と進路カウンセリングにより難関大学の進学をめざす「特別進学コース」、多様な選択科目や実践的な学習活動により基礎学力や課題解決力を身につける「普通コース」、環境を調査し研究するだけでなく、その保護や活用について考え、持続可能な未来を拓く「環境コース」の3コースを開設している。

### 3. 本校の実践について

これからの高校、中でも、将来、日本各地で起こり得る人口減少・少子高齢化が、今まさに進行している周防大島に位置する本校においては、地域の課題に関する探究的な学習活動や地域への貢献活動を通して、これらの現代的課題の解決に向けて積極果敢に挑戦し、地域コミュニティの持続、活性化に寄与する志と実践力を育むことにより、地域の未来をひらき、人との絆をつなげ、広げることができる人材を育成することが重要である。

このため、本校は、取組に当たって、「『地域の課題に積極果敢に挑戦し、未来を支え続ける若い世代の育成』～少子高齢化・人口減少・過疎化に挑戦する高校生の挑戦～」をテーマとして掲げた。

具体的な取組としては、時代や地域のニーズに応えるため新たに開設した学科「地域創生科」の

充実とともに、ふるさとへの誇りと愛着を育む教育活動を系統的・計画的に展開することとし、抜本的に見直した「総合的な学習の時間」と新たに開設した学校独自の教科である「地域創生」の時間を活用しながら、体験的な学習として、地域行事である「安下庄海の市」での活動をはじめとする地域貢献・社会貢献活動を展開している。

#### (1) 新学科「地域創生科」の開設・充実

過疎化や高齢化が進行する地域社会を維持し、持続させていくためには、若者が生きていくための産業の創出とその担い手を育成していくことが重要である。このため、「地域創生科」には、誰もが幸福に暮らせる地域を創造する人材の育成をめざし、介護福祉に関する多様な科目を開講する「福祉コース」と、地方から発信する起業家精神に満ちた人材の育成をめざし、特産品を生かした商品開発やインターネット上での出店を実施する「ビジネスコース」の2コースを設置し、持続可能な社会の創造、島の活性化に必要な人材を育成している。



なお、2016年度には、高校卒業者を対象として、介護福祉士の国家資格の取得をめざす2年制課程の福祉専攻科を開設予定である。

#### (2) ふるさとへの誇りと愛着を育む教育活動の系統的・計画的な展開

「島がすき、学校がすき、そこで生きてる人がすき」をコンセプトとして行う地域連携・貢献活動「島・学・人プロジェクト」を立案し、3年間を通じた取組を進めている。

#### ア 総合的な学習の時間の見直し

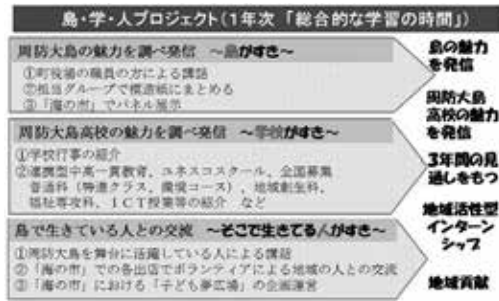
新たに開設した教科「地域創生」と連動するよう、



総合的な学習の時間の内容を見直した。

1年次では、周防大島や周防大島高校の魅力調べてこれを積極的に発信する取組や、地域の人々との交流を通して、自主性やコミュニケーション能力、自己有用感、さらには、地域に貢献する態度や意欲を育成している。

具体的には、島を舞台に活躍している起業家の方からの講話の実施や、地域のイベントでの企画・運営等の取組を行っている。



## イ 学校設定教科「地域創生」の開設

学科「地域創生科」の設置とともに開設した教科「地域創生」では、“地域の経済・産業、文化、福祉の発展に寄与するとともに、環境と共生する持続可能な社会を築き、誰もが幸せに暮らせる活力ある地域づくりに貢献する社会人として必要な資質と態度を養う”という教科の目標の達成に向けて多様な科目を開設している。



### (ア) 科目「社会人基礎」

1年次の全生徒が履修し、社会人としての心構えやチームで働く力など、職場や地域社会で多様な人々と関わりながら仕事をしていくために必要とされる資質や能力を身につけている。



<「社会人基礎」でお辞儀の練習>

### (イ) 「地域創生 I、II」

地域創生科の生徒が履修する専門科目であり、調べ学習や実地調査を元に、地域における福祉やビジネスの意義・役割を理解し、地域の一員として望ましい心構えを身につけている。

「安下庄海の市」実行委員会と連携して実施した「商品開発コンテスト2015」は、アイデアと工夫により地元で取れた水産物の食材としての新たな価値を創出しようというもので、今年度は、太刀魚と鯛を食材として2年次生全員からアイデアを募り、ビジネスコースの生徒が、地域の方々の協力を得ながら何度も試作を重ね、商品化した。試食会では約8割のお客様から「大変おいしい」との感想を頂いた。

また、「安下庄海の市」で実際に販売された「うずしお丼」は、大好評でたちまち完売となった。



<タチドッグと梅天の試作品>

福祉コースでは、「100歳プロジェクト」と名付けた「ふれあい給食」を実施し、高齢者との昼食や、唱歌を歌いながらゲームをして交流を深める取組も実施している。



<「ふれあい給食」(100歳プロジェクト)>

### (ウ) 「環境科学 I、II」

環境コースの生徒が履修する科目で、身の回りの自然や環境を研究することを通じて、科学的な知識や技術を身につけ、島外へ発信していく意欲や態度を育成している。今年度は地域の小学校を訪問し、「子ども科学教室」を開催する取組を行った。



<環境コースの生徒による「子ども科学教室」>

### (エ) 「フィールドワーク I、II」

普通コースの生徒が履修する科目で、地域の課題について考え、学習成果を発表する活動を通して、地域の課題に積極的に取り組もうとする意欲や態度を育成している。生徒たちが自ら課題を見つけ、調査内容をまとめ、発表するだけではなく、最終的に課題を整理し、解決策を提案するまで指導する。今年度は、郷土を代表する作詞家である星野哲郎先生について地域の方々にインタビューしたり、150年前、地元が戦場となった四境戦争について、講義を受けたり、資料館や神社に足を運んだりして学習を深めた。また、学んだ内容をパネルにまとめ、「安下庄海の市」で展示し、若い世代や島外の人に伝える活動に取り組んだ。



<星野先生の演歌(援歌)にちなみ、支えにしている言葉を調査>

### ウ 「安下庄海の市」での地域貢献活動

学校近隣の広場で月に一度開催されている地域行事「安下庄海の市」を、学習の場、学習成果発表の場として活用している。具体的には、総合的な学習の時間等で調査した周防大島と周防大島高校の魅力についてのパネル展示や起業家による出店ブースでのインターンシップに加え、子供向けブース「子ども夢広場」の開設を提案し、ペットボトルボウリング等、子供が遊べる遊具等の企画の立案、運営などの活動に取り組んでいる。高校生が

地域の行事に積極的に参加し、地域の方々との交流を深めることで、周防大島を元気にする地域貢献の機会としている。



<子ども夢広場で輪投げをして遊ぶ子供たち>

### エ 「すおうおしまキレイな海岸」フォトコンテストの実施

県環境生活部が企画した「やまぐちのキレイな海岸」フォトコンテストを活用した校内フォトコンテストを夏季休業中の課題として実施した。生徒が携帯・スマートフォンで撮影した風景写真をメールに添付し送信する取組で、生徒に周防大島の美しい自然環境を再認識させるとともに、環境美化や保全への意識の向上をねらいとしている。今年度は33作品を応募し、6作品が県入選した。



<フォトコンテスト入選作品>

このほか、生徒会主催の地域清掃活動「クリーンウォーク」を年に4回実施しており、多い時には100名を超える生徒がボランティアとして参加している。また、ハイキング等の学校行事を利用し、ゴミ拾いをしたりするなどし、生徒の環境美化に対する意識はここ数年で確実に向上している。



<通学路を清掃する本校生徒>



### (3) “届けよう、服のチカラ” プロジェクト

株式会社ユニクロが実施している取組に今年度から参加し、不要な子供服を世界の難民へ送る活動を行っている。次世代を担う生徒が、地球規模の問題を理解し、解決に向けて地域社会と連携を深めていくなかで、地域のよさに気付き、地域に貢献していく姿勢を身につけさせることを目的とし、積極的に地域に出向き、子供服回収の協力をお願いした。「安下庄海の市」でのチラシ配布や、地元ケーブルテレビ番組への出演による協力依頼等により、地域の小中学校をはじめ、多くの人々から、段ボール箱30箱分の子供服、計1,815着を回収することができた。体育館のフロアいっぱいの子供服を見て、生徒は社会の役に立っている自己を実感できたのではないかと考えている。



<体育館いっぱいの回収した不要な子供服>

### 4. 成果と課題について

本校は、これまでも中高一貫教育をはじめ、地域に根ざした教育、キャリア教育など、一人ひとりの生徒と真剣に向き合いながら、様々な教育活動を展開してきた。ICT機器もいち早く導入し、全普通教室に電子黒板を設置し、工夫した授業を行っている。また、中山間部にある学校の実情を踏まえ、塾がなくても勉強ができる、塾のいない学校を目指した取組も積極的に行っている。

地域創生科の開設後は、未来を拓き、支え続ける若い世代を育成するための様々な活動に取り組み、生徒一人ひとりが地域社会の一員として、主体的に持続可能な社会を創造していくことができる態度を育んできた。また、ユネスコスクールに認証されてからは、ESDという視点から従来の教育実践を捉えなおすことができ、取組の意義付け・意識化とともに、新たな取組につなげることができた。中でも、今年度より実施している難民への

不要服の提供活動である「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」は、世界的に難民問題が取り上げられる中、自分たちの取組が、社会や世界とつながっていることを実感する絶好の機会であることから、今後より充実させ、ESDの基本理念である「think globally, act locally」をより具現化していきたいと考えている。

いずれにせよ、生徒にとって身近な取組を展開する中で、達成感を持たせたり、地域の期待を実感させたりすることができ、志を有する地域の大人との交流が、生徒を変える原動力となり、生徒の自己肯定感・有用感の高まりを実感している。

こうした本校の組織的、計画的な取組が評価され、冒頭にも紹介したが、今年度、ESDとキャリア教育関係の2つの全国的な学校表彰を受けることができた。これを励みに、より地域の期待に応え、より地域が活性化するように努力を重ねていくことで、本県をはじめ、全国の高校の参考となるモデルを示していきたい。



<全国表彰を県教育長へ報告>

終わりに、現在、山口県は、コミュニティー・スクールを中心とした“地域とともにある学校づくり”を推進しており、小中学校の設置率は、全国一である。こうした中、来年度、本校は県内の公立高校では初めて、コミュニティー・スクールを導入する予定であり、今後は、コミュニティー・スクールの仕組みを生かしながら、地域や学校が抱える課題を地域の方々と共有し、地域に存在感のある学校づくりを進めていきたい。

## 小 学 校 賞

神奈川県横浜市立永田台小学校  
校長 住田 昌治 主幹教諭 広木 敬子

### 「もみじアプローチ」で変容し続ける学校 ～ホールスクールアプローチのデ・ザイン～

#### 永田台小のESDチャレンジ

「通りかかった人に声をかけて説明する際の、相手の心をとらえて離さない永田台小の児童の視線にメロメロになっていました。ああいう子供を育てるには…と目指す児童像が見えてきました。」

昨年12月に東京ビックサイト（東京都江東区）で開催されたエコプロダクツ展で、本校の6年生の話聞いてくださった方の感想です。3～6年生と特別支援学級の子供たちは、来場者に声をかけて自分を取り組んできたことや考えていることを話します。これは、大きな企業ブースが立ち並ぶ中、学校で行うような発表形式では全く聞いてもらえない現実に直面した子供たちが、ブースから飛び出して始めた「永田台キャッチ方式」です。5年前に始まり、今では校内の学習発表の場（かがやき祭）等でも、普通に行われるようになりました。

前述の6年生は「平和」という一つの大きなテーマをコアに、1年間取り組んでいます。出会った一つひとつの事実を教員と子供たちが確かめ合い、一人ひとりの思いに寄り添い、納得しながら実践してきました。しかし、子供たちにはそれぞれの思いがあって意見がぶつかることもあります。

「もやもやがあってもいい」「答えのない問いもある」「全ての問いに白黒つけられるわけではない」というようなことを、子供と共有することで乗り越えてきました。



エコプロダクツ展で語る子供たち

ESD! ESD! と、力を入れて取り組むのではなく、まず子供とじっくり向き合い、本音で他者と関わる

時間を確保し、そしてつなげていくことが大切だと考えます。ESDは再方向づけです。今ある「よさ」を見だし、それを満たしていくことこそがESDのスタートなのです。

ESDの基盤は、ケアリングです。それは、学校全体に安心感や充実感を感じられるような雰囲気をつくることです。そのためには、まず大人が互いのケアを心がけ、笑顔でつながることが欠かせません。笑いの絶えない職員室では、教員同士がよく語り合います。年度初めには、各学年の年間計画（かがやきごよみ）を、ホワイトボードを囲み全教員でワイワイ言いながら作っていきます。自分の学年だけでなく、過去に担任した学年、子供たちを気にしながら作ることで、学年内外のつながりや子供の成長、課題も共有することができます。また、教科横断や総合的・関連的・系統的な学びも見えてきます。

各学年で明確なゴールを決め、テーマやつきたい力をもとに指導計画を作ってがつつと進めるのではなく、一度立ち止まって考え、語り合い、支え合う心のゆとりが大事です。

教員が安心して本音で語り合える職場では、子供も本音で語り合うようになります。

また、分かりにくいと言われるESDだからこそ、職員が納得して進めることが大切です。「壁を低く」「橋を架ける」「染み込ませる」「つなぐ」など単純化して考えることでイメージの共有をすることができます。

#### 1 サステナブルマップ

ホールスクールアプローチでより一層ESDを進めていきたいと考えていた2014年春、聖心女子大の永田佳之教授より、イギリスのオルタナティブ技術センターが作成した「サステナブルスクール」の絵を紹介されました。（「未来をつくる教育ESD」/明石書店）





### サステイナブルマップの素（抜粋）

- ・永田台小学校は、緑に囲まれた高台にあります
- ・通学路には、見守り隊のみなさんが緑のベストを着て、毎日立ってくださいます
- ・学校のキャラクターがあり、みんなに親しまれています（カニキング カニクイーン みどりくん）
- ・職員は毎日交代で北門に立ち、子供たちを迎えます
- ・ゴミステーションでは大人も子供もしっかり分別しています
- ・木曜日には30分のロング昼休みがあり、子供たちはのびのびと遊びます
- ・笑いの絶えない職員室
- ・先生たちは個性豊かで、自分の得意なことを発揮しやすい雰囲気があります
- ・子供の話をよくしています 職員会議ではまず子供の話からスタート
- ・学年を超えて全校の子供たちを全職員があたたかく見守っています とくに前に担任した子のこと等
- ・分からないときは気軽に相談したり、みんなで集まってやってみたりします
- ・当たり前をいつも見直し、よいことに対しても「より良く」「もう一歩」と考えます
- ・笑顔であいさつする子が増えています ハイタッチ運動が始まりました
- ・困っている子がいたらほっておかない雰囲気があります
- ・各学年の学習の交流がひんぱんに行われています
- ・クラスや学年の垣根を感じません

・・・（詳細は本校ホームページにあります）

学校内のみならず、地域社会にまで子供の「価値観や行動、ライフスタイルの変容」を通して、持続可能な社会形成をめざすことを考えると、普遍的なモデルはなくとも、あるイメージを与えてくれるようなものがあればよい、とのお考えからでした。私たちはこのお話をうかがった当初は「こんな立派なマップがつかれるとは思えない」と感じていました。しかし「できることから、まず行動してみよう」をモットーに、ラフスケッチを描いてみることから始めました。

できた絵に興味をもった先生たちは、付箋を使って、「永田台のよいところ」「続けていきたいこと」を絵の上に増やしていきました。集まったよさは約60個。これを使って夏休みに第1版のサステイナブルマップが完成しました。

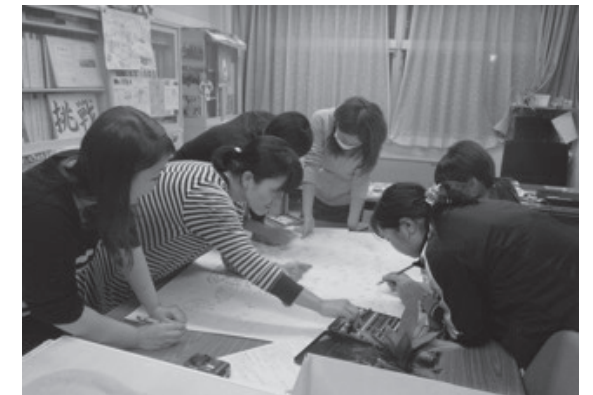


サステイナブルマップ第1版

よさを見つけ共有していく中で、共に見えてくるのは課題です。よさはマップに生かし、課題は「すぐになんとかすること」「どうしたらよいか考えること」「話し合うこと」等に分け、職員室の目のつくところに貼っておきました。角度を変え、学校の日常の中にあるよさや持続可能性を見つめることで、教員一人ひとりの意識や行動が変わっていきました。

保護者の協力も得て集まったよさは100個を超えました。これを「子供を取り巻く環境・自然・中心に据えている大切な『命』『先生たちが元気！』『子供たちも元気！』『保護者・地域の方と、そして世界とつながる』の4つの項目に分け、イラストの得意な教諭を中心に、一つひとつを絵に表していきました。

学校のよさを描き、それが視覚化されパッと目に入ってくるのですから、このマップづくりはとても楽しいひとときとなりました。子供や先生方の話をしながら色をつけていき、第1版では入りきらなかった絵も入れ、学校の外とのつながりも描き入ると、四つ切り画用紙大だったマップは、模造紙大にまで広がりました。そして、ユネスコスクール岡山大会で発表しました。



校長室に集まってワイワイと色ぬりをする

作っておしまい、では決してなく、このよさを持続させていくために、現在は、このマップをもとにしたESDの学校評価の仕組みを作成しています。また、地域の方々の活動とつながりながら、学校をコアにした「地域サステイナブルマップ」の作成にも取り組んでいます。

### 2 もみじアプローチ

もともとある学校文化の枠組みは習慣になっているものも多く、変えていくことが難しいことが多くあります。また、急激な変化は反発やあつれきを生んでしまいます。

永田台小のホールスクールアプローチは、まるでもみじが色づくように、ゆっくりゆっくり、でもしっかり染まっていく「もみじアプローチ」をイメージしています。

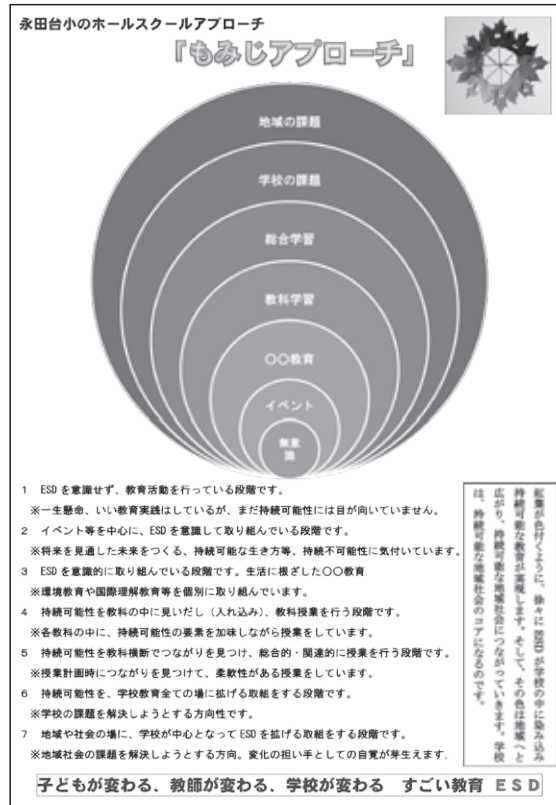
次ページにある図は、ESDが徐々に学校の中に染み込み、持続可能な教育が地域へと広がっていくことを示しています。無意識の取組から、地域の課題を引き受け持続可能な地域社会のコアとしての学校になるまでの7段階に分けた指標です。

染まっていくスピードはみんな一緒ではないです



し、染まりははじめるところもさまざまですが、大人も子供も悩んで、行きつ戻りつしてよいのです。

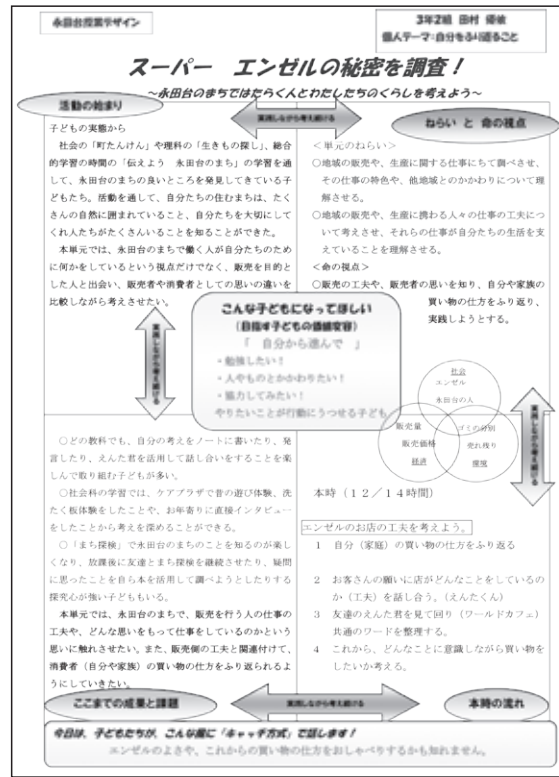
ESDはそういう日々の営みなのです。



### 3 変化を起こす研究・研修へ

かがやきごよみ(年間計画)を学年を超えてみんなで作成するようになった私たちは、授業研究会においても円形ホワイトボード「円たくん」を囲んで主体的に話し合うことを重ねています。職員同士、お互いをケアしながら、あらゆるつながりを生かし、それぞれの個性を発揮して授業をつくらうとしています。

「こうしなくてはならないのでは」「どこかに答えがあるのでは」と考えがちだった従来の研究の進め方や形骸化した研修から抜け出し、「主体的に学び続ける教師の姿こそ子供のモデルとなる」を合言葉に、研究会の進め方、あり方についても改善を重ねています。



永田台授業デザイン

### <永田台授業デザイン>

中心に「目指す子供の価値変容」を置くことでこの授業が目指すところをはっきりさせています。また、教師が指導案づくりに時間をかけすぎたり、詳細にわたって書き、決めすぎてしまうことから自由になることで、より柔軟に、子供の主体性や思考の流れを大事にすることができるようになりました。

### <研究会の進め方>

授業デザイン検討の時間も、授業後の研究会でも、教員がそれぞれの主体的な思いで、参加部会や話し合いたいことを選べるようにしています。(この指とまれ方式)

「今日の自分の問題意識」「何を話し合いたいか」を出し合い、共有してからグルーピングし、さらに途中でボードを見合ったりグループを変えたりし(ワールドカフェのように)あらゆる角度から考えられるようにしています。また、グループで話し合われたことを、共有の時間を設けて全体化し「今日のGAP(グローバル・アクション・プラン=自分が取り組むこと)」を設定して終了します。



研究会では熱く思いを語り合う

### 4 「デ・ザイン」へのチャレンジは続く

「de・sign」には「脱・枠組み」という意味が込められています。枠組みから自由になり、これまでの学校生活で当たり前になっていた考え方を見直し、急がずじわじわと変容することをイメージしています。

時には「軽いちゃぶ台返し」のつもりで、これまでの見方を思い切って変えることも必要です。また「トップダウン」で指示されて動くのではなく、「ボトムアップ」でそれぞれが主体的に動くことができればより楽しく変容できます。

本校の保護者や地域の方が信頼の声を寄せてくださること、来校された方が「元気をもらった」「また来たい」と言ってくくださることから、教師の変容が子供の変容、学校の変容をもたらし、地域の変容へと拡がる好循環が実現していることを実感しています。

今後も、学校全体どこを切っても持続可能性にあふれる、元気な学校をデ・ザインしていきます。またホールスクールアプローチ(もみじアプローチ)の指標づくりにもチャレンジし、発信していきます。

ワクワクする、楽しい、やさしい、居心地のよさを実感できるのがESDです。みんなでESDの魅力を実感し、旧態然としたシステムに変容をもたらしましょう!



## 中 学 校 賞

福井県勝山市立勝山北部中学校  
校長 水上 俊成

### 1. はじめに

全校生徒128名、教職員18名の本校は、四方を美しい山々や水田に囲まれ、周辺には一級河川の九頭竜川や温川が流れる自然豊かでのどかな地域に位置している。生徒は身近な自然に親しみながら生活している。昨年度からユネスコスクールの認定を受けた。

本校のESDテーマは「勝山を美しく、元気に、有名に」。4年前、「大人になってもふるさと勝山に住みたいか」と生徒にたずねたところ、「住みたくない」と答える生徒が多く、その理由を「勝山には何もないから」と答える生徒が多かった。そこで、ふるさと勝山について見つめ直し、見つけたことや気づいたことを周囲に発信することにした。大人になっても自分達が住み続けたい勝山市を目指して、「北中まちづくりプロジェクト」として4年前からESDカレンダーをもとに全校体制で取り組んでいる。

自分たちの活動を全校に、家庭に、地域に、『発信』する活動を取り入れ、思考力・判断力を高め、つながりを大切にして自分の思いを発信できる生徒の育成を目指している。

### 2. 具体的実践内容

#### (1) 「勝山を美しく！」

##### <実践1 九頭竜川清掃 (全学年)>

白山水系のもと、勝山市および校区内を縦断する九頭竜川を見つめ直すため、市が開催する「クリーンアップ九頭竜」に親子・地域住民で参加してきた。大量のゴミが回収され、分別作業を行う中で大人が出したと思われるゴミが非常に多いことに気づいた。ゴミを減らすためにはこのような清掃活動をするだけでなく、もっと周囲の大人に発信し、意識づけを行う必要があることを学んだ。今年度で6回目になるが、少しずつではあるが減少していることにも気づいた。

##### <実践2 オオキンケイギク、フランスギクの駆除活動 (1、2年生)>

身近に生息する外来種であるオオキンケイギクとフランスギクの駆除活動を実施し、勝山本来の美しさを取り戻そうと活動に取り組んだ。1年生は、校区の生息している場所を事前に調査し、地図にまとめた。当日は校区の小学6年生と駆除活動を行った。活動後には、小学生にメッセージを送るとともに、地域の方へは、駆除の協力を求めるチラシを作成し、配布した。

また、2年生は法恩寺山有料道路沿いに多く生息していることを確認し、市環境政策課の方と協力して駆除活動を実施した。継続して行うことで、外来種が減少していることにも気づいた。

##### <実践3 コカナダモの駆除活動 (1、2年生)>

本校の敷地を流れる温川には在来種のバイカモが生息する。そのバイカモを守ろうとする地域の方と協力して、外来種であるコカナダモの駆除作業を夏休みの登校日を利用して活動に取り組んだ。大人が出したと思われるゴミにも気づきながら、よりよい環境づくりに励む必要があることを学ぶことができた。これで3年目になるが、この活動を継続することで少しずつコカナダモが減少していることが確認できた。



##### <実践4 セイタカアワダチソウの駆除活動 (1、2年生)>

在来種のススキの生息を脅かすセイタカアワダチソウの駆除活動も行う必要があることを考えた。

そこで事前調査を行いどのあたりに分布しているのかを調べた。そして、校区の小学生に呼びかけて、当日は一緒に駆除活動に取り組んだ。活動後は、どうすると外来種を減らし、勝山本来の美しい自然を取り戻すことができるのか考えさせた。



2年生は生徒会中心に作成したチラシを14歳の挑戦（職場体験学習）の時に、事業所の方に渡して協力を依頼した。また、生徒会執行部は校区の公民館をまわって、駆除活動への理解と協力を依頼し、チラシを渡した。さらに、市環境政策課の方にこれまでの環境保全活動を報告するとともに、今後の取組を提言した。結果的に、多方面にも広げることができた。



また、市の広報誌の1ページに、市民の皆様自分たちの思いを発信したり、市全体の区長会の場でも提言できる機会を得ることができた。さらに、これらの環境の取組をもっと多くの方に啓発するために、勝山市最大の祭りである、左義長祭りの時には自分たちが行ってきた活動の紹介や勝山市の自然を守っていかうと呼びかけるチラシを配布した。



生徒会が作成したチラシ



H27.7.31 福井新聞

### (2) 「勝山を元気に！」

#### <実践1 学校祭の体験活動で勝山の魅力発見！ (全学年)>

勝山市は繊維のまちである。そこで、ふるさと勝山についてもっと知るために、ゆめおーれ勝山の方をゲストティーチャーに迎えて全校生徒を対象にベンガラ染め、ミサングづくり、コースターづくり、まゆ玉づくりの体験活動を行った。45分ほどの体験活動であったが、どのグループも意欲的に取り組み、繊維を身近に感じる事ができた。2年生は後日学芸員の方と市内の史跡名所を見学して魅力を発見するとともに、繊維の歴史について学び、魅力を発信しようと思意欲を持つことができた。

#### <実践2 はびねすダンスで勝山を、福井を元気に！ (全学年)>

3年後に福井県で開かれる国体に向けて、ふるさとを元気にするためにはびねすダンスを体育



大会や市あげての夏祭りや老人福祉施設で披露し、意欲的に参加している。

### <実践3 雪室の見学から勝山の魅力発見！（3年生）>

雪を貯蔵した雪室の見学をし、雪だるま財団の方からの講話を聞いた。雪を活用した勝山の魅力づくりの可能性を考えることができた。



### (3)「勝山を有名に！」

#### <実践1 勝山をPR！（全学年）>

これまで、生徒会中心にステッカー、クリアファイルを作成し、祭礼時などに販売してきた。また、地域の行事に参加するときに、我が校の取組を発信するために、『北中まちづくり法被』も制作してPRに役立ててきた。それらに続くものとして、恐竜をモチーフにしたエコバッグを制作した。2月の地区の雪祭り、勝山左義長まつり（北陸三大奇祭の一つ）、8月の市の夏祭りで販売した。その際に、環境保全活動で取り組んできたことをチラシにまとめて配布した。売り上げたお金を環境保全活動に役立てるために、校区の小学校に分配した。また、3年生は修学旅行で勝山をPRするため、英語で作成した勝山PRパンフレットを東京で配布した。



#### <実践2 勝山みやげづくり（2年生）>

勝山に来た方が買って帰っていただけるような勝山みやげをつくらうと、勝山市でスイーツ店を経営されている方をゲストティーチャーにお招きし、勝山への思いや中学生に期待することなどを語っていただいた。夏休みを利用して、勝山市を代表する「恐竜」に特化してスイーツを考え、2年生で紙粘土や絵の具を利用してサンプルを作成し、アイデア用紙とサンプルを届けた。キャリア教育の視点で勝山を盛り上げようと活動しており、報道でも大きく取り上げられた。



#### <実践3 勝山PR動画づくり（全学年）>

勝山をもっと多くの方に知ってもらおうと、勝山市の様々なスポットではびねずダンスを踊り、それを1本の動画として制作し、動画サイトに投稿しようと夏休みを活用して撮影に取り組んだ。

生徒会を中心として、全校に呼びかけたところ、1年から3年まで多くの仲間がふるさと勝山をPRしようと都合のつく時に積極的に集まり収録した。

できあがった動画は学校祭で生徒・保護者・地域の方に披露した。また、市長にも視聴していただき、市の公認を得て、市のHPにもリンクを貼っていただけるようになった。



### 3. 成果と課題

全校生徒にアンケートを行った。項目は、「勝山が好きか」「大人になっても勝山に住みたいか」そして、「将来、勝山の役に立ちたいか」の3つである。すると、8割の生徒が、「自然が多い」「人がいい」「空気がきれい」「他に誇れる場所がたくさんある」理由では「好き」と答えたうちの半分の生徒が「大人になっても勝山に住みたい」と答えている。ただ、「田舎だ」という理由で「嫌い」「勝山に住みたくない」と答えている生徒もいる。これまでの活動を通して、勝山のよさを見つけて魅力と感じている生徒が多いことがわかる反面、「何もない」という考えを持っている生徒もいることがよくわかった。また、半分近くは将来の夢がまだ定まっていないため、「どうなるかわからない」と答えている。さらに、半分の生徒が「将来、勝山の役に立ちたい」と考えている。「大人になっても環境活動をしていきたい」「勝山の人を元気にできる仕事に就きたい」「地元を盛り上げたい」という考えが多く見られた。

「勝山には何もない」「勝山の自然は豊かだ」と考えていた生徒達に、環境保全やまちの活性化を考え、自分達にできることを模索することが今後の生き方を考える上で大きな成果があったと思われる。福井新聞のヤングこだま欄に、生徒の素直な思いが掲載された。また、清掃や駆除という小さな活動の継続が大きな成果を生むことも実感できた。さらに、セイタカアワダチソウ駆除活動を毎年行うことによって、そこに生息するススキが戻ってきている現実も確認することができた。今

後もこういった活動を継続して行く必要がある。

これらの活動は報道でも大きく取り上げられ、発信方法の正しさを実感した。発信方法を考えることで、国の機関へつなげようと試み、見事、達成することができた。修学旅行では、3年生が石破地方創生担当大臣と面会する機会も得ることができた。生徒たちはこれまでの活動を報告し、大臣から「このような取組が日本をよりよくしていく」という激励の言葉をいただくことができた。このような発信を通じた取組が地域社会を変えていく波及効果を生み出し、地域からの理解や協力も高まり中学生からの地方創生となったと自負している。



さらに、こういった取組を通して、生徒たちのプレゼン力と自分の思いを相手の心に届けるための発信のスキルは大いに向上した。勝山がもっと好きになった生徒達に、更に広い視野で深い所



まで探究できる目とスキルを身につけさせたい。そして、将来も勝山に住み続け、ふるさとを盛り上げていける生徒を今後も育てていきたい。それが様々な課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出し、持続可能な社会を創造していくと期待している。

## 高等学校賞

北海道留辺蘂高等学校  
教諭 安東周作 福田淳史 沼倉ななみ

### ESDを基軸とした小規模総合学科の全体計画と特色ある教育実践

〔概要〕北海道留辺蘂高校は平成24年度にユネスコスクールに加盟して以来、英語や理科の授業を中心にESDの実践を行ってきた。その後、キャリア教育の全体図の中にESDの概念を位置付け、4年をかけて全教科の学習計画の中にESDの観点を取り入れ、授業のみならず評価の方法も抜本的に改革した。本稿では、ESDを基軸とした総合学科の特色ある教育実践を紹介するとともに、本校の教職員の意識変化を促した4年間の組織的な取組について述べる。

ら12年の間、文理系列、商業・情報系列、芸術・体育系列、家庭・福祉系列の4系列を軸に教育課程を編成していた。

#### (2) ユネスコスクール加盟以後の教育課程の変化 (平成26年度入学生以降)

従来の4系列を見直し、国際系列と福祉系列の2系列と定めた。この2系列の特徴は、系列内にグループをおく新しい発想である。国際系列には、国際理解グループと環境グループ、福祉系列には、福祉グループ、保育グループ、ビジネスグループを内包し、「コミュニケーション力」をキーワードとした。これはESDの「つながり」に対応するものである。各グループでの学習内容を、既存の学習指導要領の内容に加え、ESDを視点にすることによって、学習成果の向上を図った。

#### 1 ESDの全体計画とキャリア教育

本校ではユネスコスクール加盟年度より、各教科毎に授業内容を書き出し、キャリア教育とESDとの関連づけを行ってきた。当初、ユネスコスクール推進教員を1名命課し、ESD活動の窓口にしたが、個人の負担が大きく、学校全体の中に浸透させることが難しかった。そこで、平成27年度より分掌の改編に伴い、分掌内にESDの仕事を組み込み、推進教員と分掌の横の連携を強化させながら、学校全体で効果的にESDに取り組む体制を整えた。その結果、年度初めに全教職員が「キャリア教育に基づくESDの全体計画」(年間計画)を立て、各教科のみならず、分掌・学年・特別活動の中でESDの取組目標を設定し、総合学科のESDカレンダーを作成した。それをもとに、年2回「ESDふりかえりシート」(資料1)を活用し、それぞれの活動を総括することで、効果的なESD活動を行えるよう工夫した。

#### 2.2 観点別評価の本格的導入について

観点別評価は、本校でもユネスコスクール加盟以前から実施していたが、実態としては教科・科目において、独自に研究し、実施しているものであった。加盟を機に、この状況を改善し、より良い授業実践にすべく、教科の枠組みを超えて、組織的に観点別評価を研究してきた。

具体的には、平成25年3月に観点別評価の項目別評価方法についての研修を実施し、観点別評価の各項目をどのように授業に盛り込み評価するかを学び、評価方法の意識変化を促すとともに、授業や試験の在り方を見つめ直す機会とした。英語科と体育科の具体的実践例を参照した後に、グループで討議し、理解を深めた。

平成26年8月には、観点別評価の単元での取り扱い方に関する研修を実施した。目的は、各教科の観点別評価を踏まえた、授業の具体的な指導方法を共有することと、単元の中で評価項目をバラ

#### 2 ユネスコスクールとしての教育課程

##### 2.1 教育課程変遷とESD

###### (1) ユネスコスクール加盟以前の本校の教育課程 (平成25年度入学生まで)

平成12年4月に総合学科への学科転換をしてか

勝山北部中2年  
10年後は24歳なので、もう社会に出ていますね。どんな職業についていますか。僕の今の夢は大工や建築士です。聞きたいことがあります。あなたは勝山にいますか。勝山は今よりもっと住みやすくていい町になっていませんか。僕たちが取り組んだ外来種駆除は

勝山に残って  
自然守りたい

勝山にいますか。僕は勝山に残って働きたいです。勝山はいい町だから。今の勝山でも十分に住みやすいですが、10年後の自分をもっと住みやすくなるよう、これから外来種の駆除を続け、勝山の自然を守っていきたいです。

10年後の自分へ。住みやすい勝山に残っていますか。

テーマ「10年後の自分へ」  
H26.9.29 福井新聞



ンスよく設定し、学習活動のねらいを明確にすることであった。各教科で指導案、教材を提出してもらい、グループに分かれての討議を行った。

平成28年1月には、年間授業計画作成にあたって、観点別評価の各観点の力をどのように育むかをテーマに、校内研修を予定している。

### 3 各教科特別活動等でのESD実践の一例

#### 3.1 国際理解・人権・平和教育

世界一大きな授業に参加し、国語科と理科が連携し「環境科学」、「国語表現」、「産業社会と人間」の授業で、世界の環境汚染、貧困、識字などを題材に教育の大切さについて考える授業を行った。マララ・ユスフザイさんを取り上げ、世界の貧困と教育格差の問題や、学校での学びの意義について考えた。

#### 3.2 英語科でのESD実践

本校英語科の授業では、ペアワークやグループでのスキット活動を行い、学び合いができる環境づくりに努めている。3年次生の授業では「私の名前の由来」発表、「私の理想のロボット」、「北海道の観光地紹介」プレゼンテーション、ショッピングスキット（写真2）等を行った。また、ALTの協力を得ながら、毎月英語科通信を発行し、授業で取り上げて、英語に親しんだり、異文化への興味関心を持たせるきっかけとしている。さらに、学校設定科目「外国事情」では、年5～6回複数の北見工業大学の留学生を講師として招き、母国の文化や教育事情について講話を実施している。



〔写真1〕国際理解講演会の様子



〔写真2〕ショッピングスキット

#### 3.3 理科でのESD実践

学校設定科目「環境科学」の授業では、「教室の中にある身近なゴミ問題からグローバルな環境汚染へ」というような連続したスケールで問題を設定し、課題解決能力を養うことを目的とし、①ESDを基軸とした環境論の授業計画の策定と実施 ②言語活動を中心とした理科教育と科学技術コミュニケーションの実践 ③地域活動を通じた人のつながりとコミュニケーション力の育成 という3つの柱を軸に教育活動を展開してきた。③に関しては、NPO法人常呂川自然学校と連携し、河川環境教育の一環として、留辺蘂町内を流れる無加川の生態系調査を実施した。オホーツク特有のサクラマス・サケ・カラフトマスの三種のサケの棲み分けの話や生息域の調査、河川調査の方法などを学んだ。この学習を踏まえ、地形図を読み解き、水循環を体験的に学ぶワークショップ（プロジェクトWET）を行った。



〔写真3〕無加川での河川実習の様子

#### 3.4 地域に根ざした福祉・家庭教育

町内の保育園・幼稚園や福祉施設と連携し、「子どもの発達と保育」、「子ども文化」、「介護福祉基礎」等の授業では、子どもや施設利用者との交流を積極的に行っている（写真4）。また、留辺蘂町内の地域イベントでのボランティア活動にも参加するなど、地域とのつながりの意識やコミュニケーション能力の育成を図っている。



〔写真4〕保育実習の様子

#### 3.5 生徒会活動

生徒会では執行部を中心に、生徒の自発的なボランティア活動や積極的な地域交流への呼びかけを行っている。また、昨年度より毎週木曜日に、昼休みに体育館を開放することと合わせ、携帯電話を全く利用しない「Noケータイday」を実施し、生徒同士のコミュニケーション能力の育成を図る活動をしている。さらに、環境保全活動として町内の清掃活動「クリーン作戦」の実施や、アフリカヘラクチンを送る活動の一環として、ペットボトルキャップの回収運動を実施している（写真5）。



〔写真5〕ペットボトルキャップの贈呈式

#### 3.6 進路研究会

生徒の進路意識の向上や幅広い教養を身につけることを目的とした進路研究会を設置し、専門家による遺伝子工学の実験やエネルギー講話などの学習会を行っている。特に、夏期学習会では毎年JICA(帯広)より講師を招き、海外でのボランティア活動や世界の食の問題など、「世界と私」をテーマとしたワークショップを開催している（写真6）。



〔写真6〕夏期学習会の様子

### 4 実践による変化と展望

本校全教職員を対象に、本年度前学期に実施したESDふりかえりシート（資料1）の集計結果を下記に示す。

キャリア教育の観点	取組状況	達成状況
①人間関係形成・社会形成能力	A (3.31)	B (3.06)
②自己理解・自己管理能力	A (3.25)	B (3.00)
③課題対応能力	B (3.13)	B (2.94)
④キャリアプランニング能力	B (2.94)	C (2.44)

表の値は、A…4点、B…3点、C…2点、D…1点として集計した。（ ）内の数値は、評価の平均値である。A～D評価はA（3.25以上）、B（3.25～2.5）、C（2.5～1.75）、D（1.75以下）としている。

中間結果から、全教職員がESDに前向きに取り組んでいるが、達成状況はまだ十分ではなく、より高い能力を生徒一人一人に身につけさせようとする教職員側の意欲が伺える。ESDを実践して3年となるが、教職員が人とのつながりや地域とのつながりを深く考えて教育活動を行うようになり、

気持ちの変化が見られ、ESDへの意識が向上している。また、授業内で積極的にアクティブラーニングを実践するようになってきた。ふりかえりをくり返すことで、一人一人が各々のESD活動を改善し、より質の高い教育活動を実践したい。

〔資料1〕ESDふりかえりシート

※ブルーの項目について記入願います

平成27年度 第1回ESDふりかえりシート (教職員用)

分掌  教科  氏名

【項目1】(教員)  
平成27年度留辺薬高等学校キャリア教育全体図(ESDとの関連)について、各教科での取り組み状況と、達成状況について質問します。詳細は4段階評価で行いますので、詳細欄より選んでください。尚、年度初めの職員会議資料をご参照願います。  
A…十分できた B…ややできた C…あまりできなかった D…できなかった

キャリア教育の観点	ESDで求められる能力	取組状況	達成状況
① 人間関係形成・社会形成能力	・コミュニケーションを行う力 ・他者と協力をする態度 ・つながりを尊重する力		
② 自己理解・自己管理能力	・つながりを尊重する態度 ・進んで参加する態度		
③ 課題対応能力	・批判的に考える力 ・多面的、総合的に考える力 ・未来像を予測して計画を立てる力		
④ キャリアプランニング能力	・未来像を予測して計画を立てる力		

※教職員は、教育相談・特別支援についての取組状況と達成状況を評価ください。

【項目1-2】(教科)  
ESDに基づくキャリア教育に關わる、4つの能力(①人間関係形成・社会形成能力 ②自己理解・自己管理能力 ③課題対応能力 ④キャリアプランニング能力)の育成について、前年度の課題と改善期に關する改善や対策をまとめてください。(自由記述)

ESDキーワード: 観点別評価・言語活動・アクティブラーニング・学び合い・ピアサポート・国際理解教育・人権と教育・環境教育・特別支援教育・キャリア教育

【記入例】「言語活動について授業内で週に一度ペアワークを行い、互いに英語で1分間毎日あった出来事について話す取り組みを……等々

5 ESD活動一覧

○地域に根ざした教育と外部連携

- ・家庭科の授業内で留辺薬町内の幼稚園と保育所と連携し、講義や保育実習を実施
- ・課題研究英語ゼミに所属する生徒が、小学校と幼稚園で外国語活動を実施
- ・年数回、生徒会企画留辺薬地区清掃ボランティア「クリーン作戦」を実施
- ・理科における地域のNPO法人「常呂川自然学校」との協働した地域の河川環境教育実習
- ・福祉科の旭川大学との高大連携による福祉実習や大学訪問
- ・家庭・福祉科の地域の外部講師による授業
- ・英語科の授業での、北見工業大学との高大連携事業

○国際理解・人権・平和教育

- ・本校ALTが常駐する国際理解教室「Karin's room」の設置
- ・国際理解講演会の実施:「外務省講演 (H26)」 「ハンガリー大使講演 (H25)」
- ・JICA(帯広)による国際理解学習会の実施(進路研究会)
- ・世界一大きな授業2014・2015の実施(国語科と理科の横断的な活動)
- ・総合学習の時間で「命の授業」を実施(講師:カシオ計算機(株)若尾久氏)

○特別活動・その他の活動

- ・ESDを意識した新たな学校設定科目の設置(「自然環境研究」など)
- ・コミュニケーション能力の向上を図る生徒会企画「Noケータイday」の実施
- ・観点別評価とESDで求められる能力の育成を意識した授業改善を全教科で行う体制づくり

〔資料2〕留辺薬高等学校キャリア教育全体図(ESDとの関連)



教科	人間関係形成能力等	自己理解等	課題対応能力	キャリアプランニング能力
国語	グループワーク導入(読者の感情移入、読者の感情移入)について考え、意見を述べ合う	ニュース教育 読者の感情移入と自分の感情移入とのつながりを見出す観点で授業を行う	読者の感情移入(読者の感情移入、読者の感情移入)について考え、意見を述べ合う	読者の感情移入について考える(読者の感情移入、読者の感情移入) 読者の感情移入
英語	紹介書(「高橋君、行楽者等のロールプレイング」) グループワーク(「高橋君の紹介書」) グループワーク(「高橋君の紹介書」) グループワーク(「高橋君の紹介書」) グループワーク(「高橋君の紹介書」)	高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」)	高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」)	高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」)
数学	グループワーク 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」)	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」
理科	「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」)	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」
社会	「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」)	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」
保健体育	「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」)	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」
音楽	「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」)	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」
美術	「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」)	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」
家庭科	「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」)	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」
外国語	「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」)	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」
キャリア教育	「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」	高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」) 高橋君の紹介書(「高橋君の紹介書」)	自己のライフストーリー 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」 「高橋君の紹介書」



## 審査委員特別賞

東京都多摩市立東愛宕中学校  
校長 千葉 正法

### 学校を核とした地域との協働

#### ーソーシャル・キャピタルの深まりを目指してー

##### はじめに

本校では従来から取り組んできた「参加体験型の活動」「地域での活動」「自然との共生」「防災・減災」「人権尊重教育」などを「人と人」「人と自然」「人と社会」のつながりやかかわりというESDの視点から整理し、クリティカル・シンキングやアウトプットを重視したESDの学習を明確にしながら、以下の7つの柱を中心としてGAPの趣旨を踏まえた教育活動として実践し、地域社会の持続可能性を高め、持続可能な社会の担い手としてグローバルな人材の育成に学校教育全体（ホールスクール）で努めている。



地域の伝統行事「どんと焼き」に運営から参画する生徒

##### (1) 地域社会×ESD

本校の教育活動の特色の一つとして、地域行事やボランティア活動に主体的にほぼ全校の生徒が参加することが挙げられる。地域や社会に貢献したいと考える生徒の割合も市や都の平均値を大きく上回っている。これは本校の伝統的ともなり、高齢化したニュータウンという地域の期待に応える学校・生徒として定着している。種々の伝統行事である祭礼は、地域にとって、本校生徒の参加がなくてはならないものとして根付いており、次世代を担う上でも期待されている。

ボランティア活動への参加形態は、個人や有志によるもの・部活動によるもの・委員会によるもの

のなどさまざまなバリエーションがある。呼び掛けの中心は主に生徒会が担うが、JRC部（Junior Red Cross：青少年赤十字）などが主体的にコーディネートし行っている。奉仕活動と同時に、「礼儀やマナー」にも力を入れているところであるが、東京都オリンピック・パラリンピック教育推進校として「おもてなし」の精神と合わせて、生徒会考案の「あいさつスローガン」を横断幕にして掲げ、生徒と保護者による毎月の「あいさつ運動」・職員による生徒玄関での毎朝の声かけ活動などが、浸透してきていることが実感できる。このようなボランティア活動への参加を通して「コミュニケーション力」「他者と協力・共生する態度」「つながりを尊重する態度」「主体的にコミュニティに参加する態度」などの育成や地域・郷土への愛着や伝統文化に対する意識を高める指導に取り組んでいる。この結果として、文科省の学力調査の結果からもそのことが裏付けられており、「今住んでいる地域の行事に参加していますか？」という問いに関しては、継続的に全国平均に比べ2倍以上の行事参加率となっている。

##### (2) キャリア教育×ESD

本校における職場体験学習では、従来のキャリア教育に加え、ESDの視点を取り入れて、起業体験や企業（会社）の自然環境保護・社会や地域への貢献・かかわりなど、給金以外の価値観での職業選びを学習することを目的としている。そのため仕事を体験だけで終わるのではなく、働くことの意義を広い視野で考える機会となっている。また、利益追求の他に、CSRなど利益以外に何とどのようにかかわりをもっているのかを学び、「人と人」「人と自然」「人と社会」のつながりを通して持続可能な社会を構築する方法を学ぶことを目的としている。

「人と人」では、会社が顧客や地域住民とどのよ

うな接し方をしているか。「人と自然」では、会社が自然環境の保全にどのように貢献しているか。「人と社会」では、会社が社会貢献や国際貢献をどのようにしているか。以上の三つの観点から、当初は職場体験を通して「持続可能な社会の構築を目指す能力や態度の育成」「儲けや流行にとらわれない多様な職業観を育てる」の二項目をいかに育てるかが課題となっていた。

職場体験学習の実施にあたっては、事前に「環境への取組」「社会貢献」「国際理解」の3項目について各事業所へ調査活動を行っている。また、今年度新たに生徒には「企業の社会責任・社会貢献」について、その背景や多摩市にかかわりのある企業が行っている社会貢献事業について学習を行い、(株)ユニクロ・グローバルマーケティング部の方をはじめとする民間企業の方を招聘して企業の社会貢献について講義や体験活動をしていただくなどのキャリア教育の視点での取組を行った。また、さらに今年度は学校支援地域本部の創設を機会に、多摩楽農倶楽部や玉川大学ミツバチ研究所等と連携を図り、養蜂による蜂蜜生産や町おこしを通して起業体験活動の準備を現在進めている。このような指導を行ったことで、生徒は会社の在り方が問われる公害問題や自然環境の破壊などが起きていることに気付き、クリティカル・シンキングにより多様な視点から考えるようになり、会社には利益追求以外に社会貢献という大きな責任があることにも気付くようになってきた。その結果「働く目的以外に会社として社員として、社会に貢献することも大事であり大切である」と考える生徒がさらに増加している。なかでも、「紙のリサイクルやゴミを減らす、節電に取り組み環境保護を考えて働く。」項目が事前アンケートと事後で3倍以上に意識の変化を見せた。「みんなで楽しく働く」「会社が大きく発展するために働く」「自分の楽しみや生きがいのために働く」の3項目が大きく増加した。このことから、国立教育政策研究所のESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の項目の「他者と協力する態度」や「つながりを尊重する態度」そして「進んで参加する態度」に気付き、新しい職業観が定着しつつあることが

うかがえる。

##### (3) グリーンカーテン×ESD

芝生の校庭・グリーンカーテンへの取組を通して、省エネや温暖化防止等への意識を高めるだけでなく、ゴーヤの種を駅頭で配布して省エネを呼びかけたり、栽培したゴーヤや野菜を地域へ配布したり、エコバッグの制作及び東日本大震災支援活動啓発にバッグを配布したりすることで、環境教育に留まらない地域や社会とのかかわりを深める活動に継続的に取り組んでいる。

環境教育として、土づくりや肥料の活用を学び、給食の牛乳パックを利用した種まきによる資源の再利用について意識を高める指導を行った。また、完成したグリーンカーテンによる温度変化をサーモグラフィーによって数値化し、その有効性を確認させている。本校での取組において重要な点は、従来の環境教育に留まらず、収穫したゴーヤを地域住民に配布して地域との交流を図った点が挙げられる。ゴーヤを配布するために廃材を利用したケースを作成したり、配布したゴーヤのお礼に頂いた絵手紙を活用したエコバッグを制作して配布したりするなど、地域貢献へと広がり、地域住民との交流が深まった。また、このエコバッグを東日本大震災復興支援募金活動に活用したり、多摩市「Go-ya Action TAMA」のイメージキャラクターを生徒がデザインしたりするなど、中学生として地域や社会のために行動する取組を行っている。

##### (4) 防災教育×ESD

東日本大震災の経験を糧として、災害時は中学生が地域を支える必要がある。全生徒が個々に自分で考えたマイ備蓄と家族からの励ましメッセージなどを入れた防災自助パックを配備した。また、防災・減災力を高める為に避難所となる中庭・体育館の芝生を拠点とし防災キャンプを地域自治会等と行い避難時を想定したテントでの宿泊及び防災食の炊き出しを行った。そして、東京消防庁や市役所防災課の協力を得て防災関連の映像や講話クロスロードでの学習機会を設けた。気候変動との関係を学んだり、サバイバル飯や炊き出しではキャンプ参加者のみならず、地域の方とも炊き出し訓練を行ったりと貴重な体験となった。さらに、



「災害時には、中学生が地域を支える」という意識が高まり、地域と協働した防災訓練の実施を計画し、認知症サポーターの資格取得などに発展している。さらに、今年度はユネスコスクールサポートプログラムを活用してユネスコスクールである気仙沼市大谷中学校を生徒会代表が訪問し、震災後の復興や防災について相互に活動を学び、現地を視察するとともに意見交換を行う直接交流を行っている。また、東京ビッグサイトで開催された「スタンドアップサミット2015」に参加して、国内外の大・高・中生徒が復興について議論する機会を得て、復興について中学生が果たす役割についての意見交換を深めた。



#### (5) Web会議×ESD

平成23年度よりJAM（ジャパンアートマイル）のサポートを受けて、異文化理解・相互理解を深める国際理解教育の一環として、海外の学校とWeb会議を活用して協働学習を行い、学習の成果として相手とキャンパスの半分ずつに絵を描いて1枚の壁画を共同制作する「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」(IIME)に参加している。平成23年度からアゼルバイジャン、キルギス等の高校生と交流しながら壁画制作に取り組んでいる。交流には電子フォーラムやWeb会議を活用して、自己紹介や相互に調べ学習を行いながら、それぞれの文化の紹介や壁画のテーマや構図の検討を行い、完成した壁画を鑑賞しながら交流を深めている。今年度も引き続きインドネシアと継続中である。

#### (6) 東日本大震災支援活動×ESD

グリーンカーテンで収穫したゴーヤを地域の方々に配布し、お礼状を頂いたことから、生徒に

地域とのつながりをより強く意識させるために、多摩市教育委員会の協力を得て、エコバッグを制作して地域に配布する取組を行った。環境学習に留まらず、地域との交流を生徒に意識させる取組となった。東日本大震災支援活動では、このエコバッグを活用した募金活動を行い、気仙沼市教育委員会に募金を届けた。募金活動ではステッカーを制作して募金活動に取り組んだ。また、「相手が見える支援活動」としてユネスコスクールである気仙沼市立大谷中学校等との連携を進めている。初年度は募金活動で集まった募金を送り、Web会議での交流を行った。現在では大谷中学校とは支援活動に留まらずに、相互に訪問し、直接交流を深めるまでに進み、昨年は両校の生徒がソーラン節を踊り、復興やその支援について意見交換を行った。今年度は本校生徒が大谷中を訪問し、復興の現状やその課題を学んだ。生徒が自ら社会に対して行動する取組により、生徒の意識が高まり、現在も毎月11日に継続して募金活動等を行っている。また、昨年度は新たに岡山県岡山市立京山中学校と地域や世界の平和を持続発展するために定期的な協議を行っており、国連大学において成果発表を行った。このような地域とのつながりの延長に日本国内や海外とのつながりがあることを意識させることで、より広い視点で考える態度の育成を図っている。

#### (7) 芝生校庭×ESD

芝生化した校庭を地域サークルへ貸し出し、児童館の幼児やその保護者との交流、在校生同士の交流、防災キャンプでの地域住民との交流など、芝生化された校庭が地域全体の交流の拠点となり人と人をつなぎ、活気ある地域コミュニティの中心となることを目指している。

地域児童館との連携校庭をあたご児童館主催の「幼児の時間」の場として開放・提供した20組の親子が参加し、40分程芝生の感触を生徒とともに楽しんだ。地域の方々への開放はこれまで、2つのグラウンドゴルフチームへの開放を土日に行い、ゲームに必要な道具は持参してもらっている。これらの団体とは芝生の維持・管理のことで、生徒と接点をもっている。また、生徒も参加するグラ

ウンドゴルフの交流授業も行われている。また、これらの実践による生徒の意識の変容を測るために、15項目のアンケートを実施した。アンケートの結果からは、「社会の一員としての意識の向上」「他者と協力する態度の向上」「地域貢献、福祉活動を考慮した職業観の向上」「ボランティアや奉仕の精神の向上」「自然環境への興味・関心の向上」など実践的な力が高まっている。

#### (8) 成果と課題

##### ①本校の目指す方向性

ESDは、現状では持続不可能な地域コミュニティを変える力やインパクトのある次世代の育成であり、教育活動である。また、既存の教育活動を「人と人」「人と自然」「人と社会」をキーワードに、地域とのかかわりを中心にして、アウトプットを重視した実践的なESDの視点を具体化した点が特徴と言える。

既存の教育活動を生かした実践から、年間を通じた継続的な取組となり、環境問題や社会貢献に問題解決的に取り組み、地域交流と防災教育を関連させたりするなど、各取組を相互に関連させながら生徒が主体的に取り組む学校全体の実践活動であり、ESDに対する教師の指導力も向上している。また、地域のボランティア活動や環境教育、震災支援活動などの多様な取組を行ったことが、生徒一人ひとりがそれぞれの個性や特性を生かして活動に取り組む要因となり、それぞれに活躍の場の保証となっている。また同時に、地域コミュニティや行政などからも学校の取組が高く評価されている。

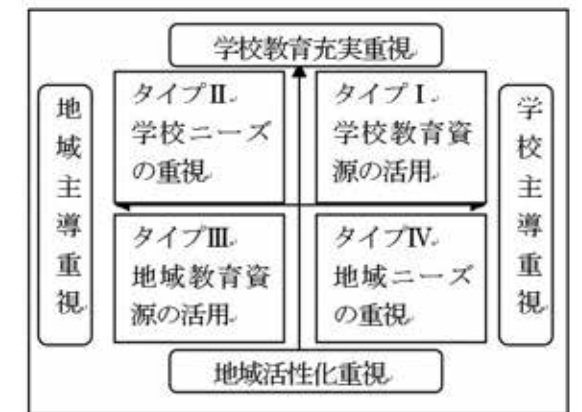
今後も地域や産学官との連携を強化し、生徒の思考力・判断力・表現力等を高め、社会における中学生としての役割を意識させ、現在から未来を見据えた行動や実践のできる生徒の育成を図るなど、一層ESDを中心としたユネスコスクールならではのダイナミックな学校教育を進めていく。

##### ②協働のかたち

学校と地域の協働は大きく4つのタイプに分けられる。縦軸に目的を置き地域活性化重視から学校教育充実重視とする。横軸には参画の在り方として地域主導重視と学校主導重視を置く。タイプ

Iは学校教育資源の活用、タイプIIは学校ニーズ重視、タイプIIIは地域教育資源の活用、タイプIVは地域ニーズの重視とカテゴリ化できる。

本校は今までタイプIVからIの移行期の協働とタイプIIからIIIへの移行期の協働が行われている。



##### ③諦めない学校経営こそ

私は本校の教育活動の歴史的な解釈に基づき「学校という全体」を変えていく必要があると考えている。具体的に言えば、それは4Cと呼ばれるホールスクールアプローチにおける「カリキュラム」「キャンパス」「カルチャー」「コミュニティ」である。

本校では地域の実態に即した学校の経営を重視している。なぜならば、子供は地域に育てられ地域に住んでいるからである。地域性という言葉もあるが、学校経営を地域と学校を互酬性というソーシャル・キャピタルの視点で考えたい。見方を変えれば、地域社会を変える学校こそパワーやポテンシャルのある学校だと言える。

##### ④2050年の大人づくり

本校は「ユネスコスクール」としてESD (Education for Sustainable Development) の推進拠点の役割を担っている。持続不可能な課題が山積する現代社会において、教育によって様々な問題を実践的に解決していこうという取組である。少子高齢化の課題を防災や環境問題や難民問題などを視点に取り組み、2年連続して昨年と今年ESD大賞の栄誉に浴した。GAP (Global Action Programme on ESD) を基盤にしながら、実践としてかなり先を見据えて、今を変えることが重要だと考えている。



西暦2050年は、エネルギー問題、人口問題、食糧問題、地球温暖化の問題などが交錯し、人類にとって葛藤と選択の時代と言える。丁度、今の小学生や中学生が働き盛りとして活躍している時代と重なる。その時代に目の前の子供たちが厳しい葛藤と選択に迫られることが予測できるならば、教育者としていま何がやるべきことやできることなのかを模索するのは必然と考える。

⑤学びを地域に広げ、地域から学ぶ

本校ではほぼすべての生徒が地域の行事には参加し、それぞれ自分の役割をもって地域に貢献している。高齢化の進んだ多摩ニュータウンという地域の課題を理解して、中学生が進んで地域活動に加わり、地域を活性化している。地域の古老たちは、「東愛宕中の生徒なくしては、地域行事は存続しない。すごく助かっている。ありがたいことだよ。」と生徒一人一人をねぎらってくれる。こうした背景には、学んだことを実践や行動で表そうと学校と保護者が様々な生徒に呼び掛けていることが功を奏している。

⑥地域防災でも共助を担う

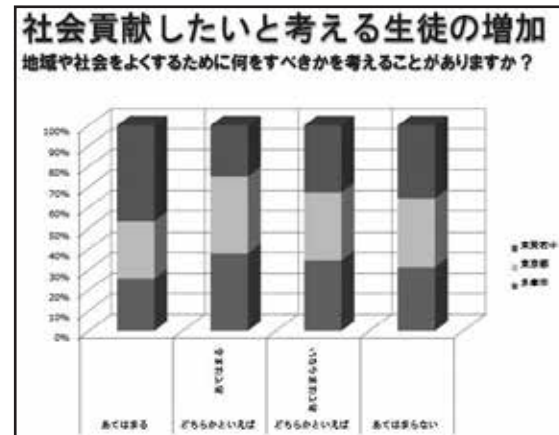
さらに、本校の防災教育は生徒が自らの「防災自助パック」を考えることから始まる。東京都では帰宅困難者抑制条例があり、保護者の多くは大災害が発生した時には帰宅できない。生徒は学校泊で公助が始まる72時間を過ごすために最低限必要なマイ備蓄を学校に準備している。自助を確実に行うのは生徒に公助への目を向けさせる仕掛けであり、生徒の中では「地域のお年寄りには認知症の人もいる。」「助けに行かないと避難所となる学校には来られない。」などと視野を広げて考え始め、全3年生が認知症サポーターの資格取得を行うまでになってきた。今年は地域の自治会や老人会が生徒と一緒に防災マップを作っている。

⑦学校支援地域コーディネーターの設置

「地域学校協働本部」を視野に学校と地域を結ぶコーディネーターを置き、学校支援地域本部「愛宕アカデミー」を立ち上げた。まず初めは地域の大学と連携して教職を目指す学生を集めて放課後学習教室を行った。学生にもメリットが出るように東京都学力ステップアップ事業を活用し、さらに

学習教室終了後には教員採用試験の対策講座も毎週行っている。

地域とのパイプ役や人材・教育資源の発掘が一層促進され、今後は学校支援本部を中核にミツバチを飼って、生徒が蜂蜜を媒介にして地域貢献ができないかという話も舞い込んでいる。



⑧まとめに代えて

学校と地域のチームワークにおいても一億層活躍が求められている。何かと閉鎖的と言われる教育界だが、ソーシャル・キャピタルや内外のチーム力を高めることにより、これまで不可能だったことが可能となり、学校経営の目標にさらに一歩近づくことができるのではないだろうか。上記グラフは東京都の調査結果の一部であるが、ESDは今後も子供主体学びを追及する学校教育において、重要なキーワードである。

1 はじめに

『笑顔・元気・夢いっぱいの子富士っ子』の育成  
- 「学校全体がビオトープ」と言われる学校 -

北に広大なJR 鉄道線、西に外郭環状高速道路に隣接し、複数の大規模団地と密集した住宅地内にある11学級（児童数255名）の小規模校である。学校周辺にまったく自然のない環境でありながら、正門を一步校内に入ると、そこは美しい草花や果樹（モモ・ウメ・キウイ・カキ・ザクロ・ミカン・ビワ・ブルーベリー…）を含む多種類の樹木を見ることができる。教職員の手作りによるビオトープには、カマキリやバッタをはじめ様々な昆虫や生きものたちが棲み着き、小さいながらも水田や畑もあって児童は四季折々の自然に触れ、自然に関わり、四季の移り変わりを目の前で見ながら様々な体験活動を楽しんでいる。



学校設立当初は地域全体に水田が広がり、用水路で魚やザリガニ取りに夢中になって遊ぶ子どもたちの姿が日常であったという。しかしながら、急激な都市化の進行により自然が次々に宅地化されて失われ、学校周辺において児童は自然に親しむ機会がまったくなくなってしまった。古くからの地域住民の中には（昔のように、地元で子どもたちにたくさん自然に触れさせたい）という思いが強く残っており、学校・地域の思いが一体となって、平成11年から当時の6年生児童を中心に、地域の理解と協力を得ながら校庭の一部にビオトープ整備を進めてきた。現在は、実りある豊かな自然環境を学校の大きな特色として各学年の児童の発達段階に合わせて教材化し、環境教育と連携した食育の充実に取り組んでいる。

2 活動の内容

(1) ねらい

学校教育目標

『心豊かな子 よく学ぶ子 じょうぶな子』の具現化を目指し、校内にある四季折々の自然と触れ合う様々な体験学習を通して、自然を感じ、自然に関わり、生命を尊重する心と心身ともに健康な児童を育成する。

(2) 実践内容

ビオトープエリアの整備に際し、全体構想をもとに不要な樹木の撤去、水田・畑・池の新設等、多くを教職員の手により進め、平成26年度末で完成とした。

ビオトープ学習については、学校評価の反省から本年度は教材化して各学年の発達段階に即して教育課程に位置付け、学習のねらいを明確にして生活科・総合的な学習の時間・家庭科・理科・社会科等の授業として実施し、本校の貴重な環境財産を全学年の児童が6年間を通じて共通体験できるように配慮した。

ビオトープエリアでは、季節に合わせた野菜・果樹栽培や植物観察のほか、様々な生き物が生息しており、カマキリ・バッタ・カエル・ヤゴ・カタツムリなどを直接、教室に持ち込んで観察学習を効果的に行っている。

地域連携も円滑であり、果樹剪定や農作物の栽培・収穫指導等、児童との触れ合いを楽しみながら活動していただいている。児童も地域の方との交流給食やお礼の手紙により感謝の気持ちを表している。また、自校給食の特色を活かして、多様な形態の学校給食を年間を通して数多く実施し、児童・保護者並びに地域からもたいへん喜ばれている。

体力向上も重点課題であり、6年間記録できるカードを児童個々に持たせ、具体的な目標を持たせて体育授業・活動を進めている。



### (3) 教育課程に位置付けた教育活動の推進

本校の特色である食育と環境学習と関連させ、児童の発達段階に応じて各学年の教育課程に位置付け、関係教科等の授業として年間計画を立て、以下の学習を行っている。

#### 1年・生活科「野菜を育てよう」



「トウモロコシの皮むき」体験

サツマイモ栽培。収穫後、2年生と合同で調理して試食。トマト・アサガオの栽培。「トウモロコシの皮むき（給食に使用）」

#### 2年・生活科「野菜を育てよう」



「サツマイモの植え付けと収穫」体験

サツマイモ栽培。収穫後、1年生の面倒を見ながら一緒に調理して試食。他の野菜栽培。「ソラメのさやむき（給食に使用）」

#### 3年・総合的な学習の時間「キウイを育てよう」



「キウイ」の栽培と収穫

「ウメ」の収穫と「梅干しづくり」

「キウイの栽培」「ウメの収穫と梅干しづくり」「グリーンピースのさやむき（給食に使用）」。理科「オクラを使った植物の育ち方」

#### 4年・総合的な学習の時間「モモの栽培」他



「モモの袋かけ」

「モモの袋かけと収穫、試食」「環境学習…グリーンカーテン（ツルレイシ）をつくろう」「エダマメの栽培と収穫」

#### 5年・総合的な学習の時間・社会・家庭科「稲作」



「稲作」…田の土作り、田植え、除草、生長観察、稲刈り、脱穀。家庭科授業で調理して試食

#### 6年・理科「ジャガイモを育てよう」



「ジャガイモ」栽培・収穫。家庭科学習で調理

#### 6年・総合的な学習の時間「桜茶づくり」



6年生が校庭に咲く八重桜の花を摘んで桜茶を作り、卒業式当日、自分たちで来賓・保護者へ出しておもてなしをし、みんなで卒業を祝う。

上記の活動には、専門家や学校応援団の指導・協力をいただき、学校・地域連携が確立している。また、これらの取組は数多く新聞・テレビ等に報道され、学校・地域の自慢となっている。昨年度はカナダ・中国から視察訪問を受け、広く世界に情報発信した。さらに、マイランチ（弁当の日）、ガーデンランチ、お花見ランチ、パースデーランチ、異学年交流ランチ、お別れランチ、保護者や地域の方との交流ランチなど、多彩な給食活動を行っている。

健康教育・食育にかかるこれらの多くの実績が多方面から認められ、これまでに学校給食において、文部科学大臣、埼玉県教育委員会、川口市教育委員会等から多くの表彰を受けている。



「マイランチ」



「ガーデンランチ」



「交流給食」



「中国からの教育視察訪問・4年生」



「カナダからの取材・5年生」

☆ — 平成27年度における表彰内容 — ☆  
「第22回コカ・コーラ環境教育賞・優秀賞」



「コカ・コーラ環境教育賞・優秀賞」

「埼玉県学校給食・優良学校」  
「川口市学校給食・優良学校」  
「川口市学校歯科保健・努力学校」  
「第6回ESD大賞・ネスレ日本ヘルシーキッズ賞」



「全国学校・園庭ジオトープコンクール2015・日本生態系協会賞」

「埼玉県学校環境緑化コンクール・優秀賞」

「彩の国埼玉環境大賞・優秀賞」

#### (4) 体力向上の取組

本校は、児童の体力向上にも力を入れており、日々の体育授業の充実を基本として、体育朝会、持久走タイム、縄跳びタイム、なかよし遊び等の体育的な取組を実施している。



「体育朝会」



「持久走タイム (ランランタイム)」



「なかよし遊び」



「体育授業」

特に、児童の体力向上については、前年度に実施した新体力テストの結果から明らかになった課題（投力・跳力）に焦点を当て、体育授業の充実を中心として、年間を通して体育朝会・持久走タイム・縄跳びタイム・異学年交流のなかよし遊び・おにごっこ等の取組を実施してきた。

一人一人の児童が自らの課題を意識して体力向上を目指したことが、本年度の新体力テストの結果に成果として現れている。

#### (5) 食育を通した望ましい生活習慣の確立

本校では、児童に「早寝・早起き・朝ごはん」の徹底を目指して上述の取組を推進し、全校児童を対象に年間3回、生活調べを実施している。これは、家庭における基本的な生活習慣や望ましい食生活について保護者の意識を啓発しつつ個々の児童の実態を把握するためのもので、結果から得られた課題を明らかにして、学校での指導に活かしている。この取組から、家庭で朝食を食べる習慣が定着してきており、ほぼ100%とすることができた。また、本校の学校給食は自校調理方式かつ学校栄養職員配置校であることから、食に関する指導や日々の給食時間における指導を効果的・計画的に実施しており、児童・保護者の「食」に対する関心がたいへん高く、児童には「残さず食べる」「感謝して食べる」「好き嫌いをなく食べる」「楽しく、マナーよく食べる」などの習慣が定着してきている。給食に出された献立は、全教室で毎日ほとんど完食(残滓ゼロ)を継続しており、「残すことはもったいない」という意識が浸透している。



「楽しい給食の時間」



「学校栄養職員による授業」



「空(から)の食缶」



「食物アレルギー対応」

各学期に行う発育測定に際し、養護教諭が学年の実態に応じて、「栄養・運動・休養と成長」について指導し、児童が自らの健康状態の把握と改善について理解を深め、実践につなげている。この内容は年間3回開催する学校保健委員会においても課題として取り上げ、保護者に対して自分の子どもの健康状態について意識啓発する有効な機会となっている。



「養護教諭による保健授業」



「学校保健委員会」



「新体力テスト」



「わくわくモーモースクール」

### 3 成果と課題

本校の様々な教育活動並びに実践は、海外を含めて広く全国に向けて情報発信し、高く評価されている。その成果が、学校給食文部科学大臣表彰・埼玉県教育委員会教育長表彰の他、環境教育でも複数のコンクールで優秀賞を受賞することとなり、保護者・地域からの強い信頼関係の確立にもつながっている。「芝富士小の給食は、世界一」は児童の合い言葉となっており、毎日、残滓ゼロを実践し、自然を愛し、命を大切に、心身ともに健康な児童の育成を具現化している。

今後、将来に向けた豊かな健康づくりのため、食育を通した望ましい食習慣の形成と定着、さらなる家庭への啓発、中学校との連携が課題である。

#### ◇芝富士小学校のイメージキャラクター◇

平成24年2月22日生まれ

「笑顔・元気・夢いっぱい  
の芝富士っ子」を目指し、  
健康で、優しく、勉強も  
しっかりできる芝富士小  
学校みんなをイメージ  
して、「ランちゃん」は、  
ランドセルから生まれま  
した(児童作品)。



「芝富士ランちゃん」



# ネスレ日本ヘルシーキッズ賞

北海道室蘭市立本室蘭小学校  
養護教諭 菅原 香織

## 1 はじめに

明治14年に開校し今年で134年目を迎える本校は、児童数152名、学級数8学級（普通学級6・特別支援学級2）の小規模校である。

南は噴火湾、北は室蘭岳の裾野に接し、多くの自然に囲まれた学校で、子どもたちはのびやかに育っている。

本校の教育は、指標を「生き生きとはずむ子どもを目指して」、教育目標を「よく考え進んで勉強する子・力を合わせてやりとげる子・思いやりのある子・たくましくきたえる子」とし、これらの実現に向けて進めている。

## 2 ねらい

本校では、『仲間とともに、豊かな心を育み、すすんで学習に取り組む子の育成』を学校課題とし、教育活動を進めている。



室蘭市立本室蘭小学校ランドデザイン

3年前からは、経営の重点「丈夫な身体づくりを基本においた『健康・安全』の充実」への具現化に向けて、なわとびやランランタイムなどの全校的な体力づくりを筆頭に、食育の充実、いのちの授業の実施、セカンドステップなどのソーシャルエモーショナルトレーニングの導入を進め、多角的な視点から取り組んできている。

これらの学びは、生涯に渡る正しい健康観・倫理観・自己管理能力の礎となるものである。社会生活

を営む上で必要不可欠なスキルを公教育の中で子ども達が体得していくことが本実践のねらいである。

## 3 具体的な取組

本校では、「自他の命を尊重し健康な社会生活を営むことが重要である」という視点に立ち、全学年による「いのちの授業」「食育」「体力づくり」に取り組んでいる。

### 1) 「いのちの授業」について

1999年より健康教育の一環として「いのちの授業」を実施している。

「いのちの授業」という言葉からは、どうしても「性に関する指導」を連想しがちである。しかし、本校では、「いのち」を単に「体や性に関する事項」ではなく、社会生活を健康的に生きるために必要な知識やスキルの習得と捉え、学習内容は取っ払って固定化せず、各学年の発達の段階やその時々の特徴に合わせて実施している。

実施にあたっては、外部講師の招聘と参観日実施（年間1回程度）を重視し、外へ開くことを心掛けている。専門の知識を持ったプロフェッショナルの話をも自分の耳で聞く事により、子ども達に授業内容をより印象深く理解させ、併せて学習内容を保護者に啓発し、家庭との連携を深めることが目的である。

また、「心」にも注目し、一昨年からは北海道教育委員会が作成した児童生徒理解支援ツール「ほっと」を導入し、児童の姿を行動だけでなく心の面から捉えることにも力を入れた。

少しずつではあるが、結果を分析しながら、児童の情動やコミュニケーションスキルに関しての教師側の理解を深め、より良い手だてを考えていくという取組が始まっている。加えて、セカンドステップなどのソーシャルエモーショナルトレーニングを取り入れ、低学年段階から児童の自己肯定感や自主性を向上させる取組も行っている。

性に関する教育（いのちの授業）実施について

〇はじめに  
本校では平成11年よりすべての学年で性に関する指導を開始し、参観日に公開して保護者への啓発・理解へつなげていく事を目標として、参観日での授業公開が始まっている。  
また、総合的な学習の指導計画を作成するにあたり、性に関する指導というテーマでは、内容が限定されることが予想されるため「いのち」という大きなテーマを設定し、指導内容に幅を持たせて授業を展開することとし、現在では「総合的な学習」「教科」「学活」で授業公開を実施してきている。

〇「性に関する教育」の基本的な考え方  
思春期の体の変化、生殖にかかわる機能の成熟、エイズ及び性感染症の予防など科学的知識の理解など直接、「性」に関連する内容の体系的な教育に加え、人間関係の理解やコミュニケーション能力など基礎となる教育内容を包含し広義の概念を「性に関する教育」と呼ぶとしている。

3. 体育・健康に関する指導（第1章第1の3）  
学校における体育・健康に関する指導は、生徒の発達の段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとする。特に、学校における食育の推進並びに体力向上に関する指導、安全に関する指導及び心身の健康の保持増進に関する指導については、保健体育科の時間とはもより、技術・家庭科、特別活動などにおいてもそれぞれの特質に応じて適切に行うよう努めることとする。また、これらの指導を通じて、家庭や地域社会との連携を図りながら、日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践を促し、生活を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるよう配慮しなければならない。

（7） 社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項  
心身の成長発達についての正しい理解  
① 学校全体で共通理解を図りつつ、体育科、保健体育科などの関連する教科、特別活動等において、発達の段階を踏まえ、心身の発育・発達と健康、性感染症の予防などに関する知識を確実に身に付けること、生命の尊厳や自己及び他者の個性を尊重するとともに、相手思いやり、望ましい人間関係を構築することなどを重視し、相互に関連付けて指導することが重要である。  
また、家庭・地域との連携を推進し保護者や地域の理解を得ること、集団指導と個別指導の連携を密にして効果的に行うことが重要である。

〇本校での実施にあたって  
本校では、平成14年度から継続されている「いのちの授業」を総覧しつつ、指導内容については変化する社会情勢に対応できるような内容を精選し、職員の間で共通理解を図り保護者の理解と協力を得ながら「性に関する指導（いのちの授業）」を実施していく。  
※ 児童だけでなく、学校にかかわる方にも広く教育内容を知らせていただくためにも少なくとも1回は参観日の公開を実施する。  
※ 指導上のポイント  
① 学習指導要領に拘り、児童生徒の発達段階に沿った時期と内容で実施すること  
② 教育上の内容について、理解の得られるものであること  
③ 個々の教員がそれぞれの判断で進めるのではなく、学校全体の指導計画に基づく組織的・計画的な指導を行うこと  
④ 教員間の共通理解だけでなく、保護者や地域の理解を得ながら進めること  
⑤ 集団指導と個別指導とによって相互に補充すること

中央教育審議会答申（平成20年1月17日）  
（心身の成長発達についての正しい理解）  
〇 学校教育においては、何よりも子どもたちの心身の調和的発達を重視する必要がある。そのためには、子どもたちが心身の成長発達について正しく理解することが不可欠である。しかし、近年、性情格の多様化など、子どもたちを取り巻く社会環境が大きく変化してきている。このため、特に、子どもたちが性に関して適切に理解し、行動することができるようにすることが課題となっている。また、若年層のエイズ及び性感染症や人権侵害も問題となっている。  
〇 このため、学校全体で共通理解を図りつつ、体育科、保健体育科などの関連する教科、特別活動等において、発達の段階を踏まえ、心身の発育・発達と健康、性感染症の予防などに関する知識を確実に身に付けること、生命の尊厳や自己及び他者の個性を尊重するとともに、相手思いやり、望ましい人間関係を構築することなどを重視し、相互に関連付けて指導することが重要である。  
また、家庭・地域との連携を推進し保護者や地域の理解を得ること、集団指導と個別指導の連携を密にして効果的に行うことが重要である。

いのちの授業実施計画

「いのちの授業」 〇これまでの指導内容と予定内容					
	H23	H24	H25	H26	H27（予想）
1年					生活科、ネスレヘルシーキッズプログラム（げんきのもと）、セカンドステップ
2年				生活科：おおきくなったよ セカンドステップ	生活科、ネスレヘルシーキッズプログラム（げんきのもと）
3年			ネスレヘルシーキッズプログラム（元気のもと）	あしたハダッシュ（生活科：生まれた時のことなど）	ネスレヘルシーキッズプログラム（からだのもの）&運動プログラム、保健
4年		ネスレヘルシーキッズプログラム（元気のもと）	あしたハダッシュ（生活科：生まれた時のことなど）	ネスレヘルシーキッズプログラム（からだのもの）	ネスレヘルシーキッズプログラム（からだのもの）&運動プログラム、保健
5年 赤ちゃんの部屋	あしたハダッシュ	ネスレヘルシーキッズプログラム（からだのもの）	ネスレヘルシーキッズプログラム（からだは自分てつくる）	ネスレヘルシーキッズプログラム（自分てつくる）	※外部講師（運動分野） ネスレヘルシーキッズプログラム（自分のからだは自分てつくる）、保健
6年	ネスレヘルシーキッズプログラム（元気のもと）	ネスレヘルシーキッズプログラム（からだのもの）	ネスレヘルシーキッズプログラム（からだは自分てつくる）	ネスレヘルシーキッズプログラム（自分てつくる）	※外部講師（運動分野） ・たばこ ・薬物乱用 ・思春期のからだ・こころ ・歯みがき大会 保健
旧6年	思春期にあらわれる変化（教科書）		思春期の防止（教科書） けがの手当て（外部講師）	※外部講師 ・たばこ ・薬物乱用 ・思春期のからだ・こころ	

いのちの授業実施内容

## 2) 「食育」について

各教科及び栄養教諭による指導だけでなく、2011年からはネスレヘルシーキッズプログラムを導入し、文字通り「自分のからだは自分で作る」を目標に、各学年で「食指導」→「運動の大切さ」という流れのプログラムを実践してきた。昨年度からは、試験的に第5学年において、運動の場面で外部講師を招聘し、BRTプログラムの内容の充実を図っている。

## 3) 「体力づくり」について

本校は校地内に手作りのアスレチック施設と広いグラウンドを有するという恵まれた環境の中、勤労を含め体を動かすことを厭わない児童が多い。従来から実施してきている「なわとび集会」を目玉としたなわとびへの全校での取組や、中高学年のドッジボールの取組に加え、昨年度から「ランランタイム」（業間を利用した持久走）を設け、更なる体力向上と運動の大切さを実感できる場面を提供している。





全員が参加するなわとび集会の様子



ランランタイムの様子

#### 4 ネスレ ヘルシーキッズ プログラムの取組

##### 1) ヘルシーキッズ プログラムの導入

食育について、本校では、生活科や学級活動、特別活動など教育活動の様々な場面で計画的に取り入れている。

加えて、室蘭市では食育の計画に、栄養教諭による学校訪問を取り入れ、発達の段階に応じた内容の栄養指導を、計画的に実施している。

小学校3年生から中学1年生まで、室蘭市内の全小中学校で実施されているが、栄養教諭をゲストティーチャーとして迎えての授業は、児童の興味や関心を刺激し、非常に効果的である。

食に関する指導の全体計画 (室蘭市立本室蘭小学校)							
<p>・ア・イの達成</p> <p>・目的意識で自主的な学習・探究活動が展開される。主体的に学習に取り組む態度が顕著である。特別活動では、責任感と責任感がある。特別活動では、責任感と責任感がある。特別活動では、責任感と責任感がある。</p>	<p>学校教育目標</p> <p>・よく考え 進んで勉強する子</p> <p>・思いやりのある子</p> <p>・力を合わせて やりとげると</p> <p>・たくましく きたえる子</p>						
<p>食に関する指導の目標</p> <p>① 食事の重要性、食事の節度、食生活を理解させる。(食事の重要性)</p> <p>② 心身の成長や健康の保持増進の上で望ましい栄養や食事のとり方を理解し、自ら管理していく能力を身に付けさせる。(心身の健康)</p> <p>③ 正しい知識・情報に基づいて、食物の高質及び安全性等について自ら判断できる能力を身に付けさせる。(食品を選択する能力)</p> <p>④ 食物を大切にし、食物の生産等にかかわる人々へ感謝する心を持たせる。(感謝の心)</p> <p>⑤ 食育のツールや食事を通じた人間関係形成能力を身に付けさせる。(社会性)</p> <p>⑥ 各地域の産物、食文化や食にかかわる歴史等を理解し、尊重する心を持たせる。(食文化)</p>	<p>学習指導要領</p> <p>食育基本法</p> <p>食育推進計画</p> <p>北海道教育委員会</p> <p>室蘭市教育委員会</p>						
<p>各学年の食に関する指導の目標</p> <table border="1"> <tr> <th>低学年</th> <th>中学年</th> <th>高学年</th> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>心身の健康の大切さ(食)を理解する。</li> <li>いろいろな食べ物(食品)の名称を覚える。</li> <li>よくよく食べて。</li> </ul> </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>心身の健康の大切さ(食)を理解する。</li> <li>いろいろな食べ物(食品)の名称を覚える。</li> <li>栄養を考えて、いろいろな食べ物(食品)を好きに食べて。</li> </ul> </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>心身の健康の大切さ(食)を理解する。</li> <li>いろいろな食べ物(食品)の名称を覚える。</li> <li>栄養を考えて、いろいろな食べ物(食品)を好きに食べて。</li> </ul> </td> </tr> </table>	低学年	中学年	高学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>心身の健康の大切さ(食)を理解する。</li> <li>いろいろな食べ物(食品)の名称を覚える。</li> <li>よくよく食べて。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>心身の健康の大切さ(食)を理解する。</li> <li>いろいろな食べ物(食品)の名称を覚える。</li> <li>栄養を考えて、いろいろな食べ物(食品)を好きに食べて。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>心身の健康の大切さ(食)を理解する。</li> <li>いろいろな食べ物(食品)の名称を覚える。</li> <li>栄養を考えて、いろいろな食べ物(食品)を好きに食べて。</li> </ul>	<p>中学校</p> <p>・望ましい食事の生活習慣を身に付けさせる。</p> <p>・食生活の改善を促す。</p> <p>・食生活の改善を促す。</p>
低学年	中学年	高学年					
<ul style="list-style-type: none"> <li>心身の健康の大切さ(食)を理解する。</li> <li>いろいろな食べ物(食品)の名称を覚える。</li> <li>よくよく食べて。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>心身の健康の大切さ(食)を理解する。</li> <li>いろいろな食べ物(食品)の名称を覚える。</li> <li>栄養を考えて、いろいろな食べ物(食品)を好きに食べて。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>心身の健康の大切さ(食)を理解する。</li> <li>いろいろな食べ物(食品)の名称を覚える。</li> <li>栄養を考えて、いろいろな食べ物(食品)を好きに食べて。</li> </ul>					
<p>1 限り4月・5月・6月</p> <p>2 限り7月・8月・9月</p> <p>3 限り10月・11月・12月</p> <p>4 限り1月・2月・3月</p>	<p>1 限り4月・5月・6月</p> <p>2 限り7月・8月・9月</p> <p>3 限り10月・11月・12月</p> <p>4 限り1月・2月・3月</p>	<p>1 限り4月・5月・6月</p> <p>2 限り7月・8月・9月</p> <p>3 限り10月・11月・12月</p> <p>4 限り1月・2月・3月</p>	<p>1 限り4月・5月・6月</p> <p>2 限り7月・8月・9月</p> <p>3 限り10月・11月・12月</p> <p>4 限り1月・2月・3月</p>				
<p>学級活動及び給食時間</p> <p>・給食の準備、配膳を大抵行う</p> <p>・給食の準備、配膳を大抵行う</p> <p>・給食の準備、配膳を大抵行う</p>	<p>学級活動及び給食時間</p> <p>・給食の準備、配膳を大抵行う</p> <p>・給食の準備、配膳を大抵行う</p> <p>・給食の準備、配膳を大抵行う</p>	<p>学級活動及び給食時間</p> <p>・給食の準備、配膳を大抵行う</p> <p>・給食の準備、配膳を大抵行う</p> <p>・給食の準備、配膳を大抵行う</p>	<p>学級活動及び給食時間</p> <p>・給食の準備、配膳を大抵行う</p> <p>・給食の準備、配膳を大抵行う</p> <p>・給食の準備、配膳を大抵行う</p>				
<p>外部講師による指導</p> <p>・栄養教諭、保健、運動会、校行事等</p>	<p>外部講師による指導</p> <p>・栄養教諭、保健、運動会、校行事等</p>	<p>外部講師による指導</p> <p>・栄養教諭、保健、運動会、校行事等</p>	<p>外部講師による指導</p> <p>・栄養教諭、保健、運動会、校行事等</p>				
<p>1年</p> <p>・おどろきあそび</p>	<p>2年</p> <p>・おどろきあそび</p>	<p>3年</p> <p>・おどろきあそび</p>	<p>4年</p> <p>・おどろきあそび</p>				
<p>5年</p> <p>・おどろきあそび</p>	<p>6年</p> <p>・おどろきあそび</p>	<p>7年</p> <p>・おどろきあそび</p>	<p>8年</p> <p>・おどろきあそび</p>				
<p>9年</p> <p>・おどろきあそび</p>	<p>10年</p> <p>・おどろきあそび</p>	<p>11年</p> <p>・おどろきあそび</p>	<p>12年</p> <p>・おどろきあそび</p>				

食に関する指導の全体計画



栄養教諭による学校訪問の様子①



栄養教諭による学校訪問の様子②

このように、2011年段階では、3年生以上は特設の食育の時間が設けられていたが、低学年についてはそのような時間を設ける事が出来ていない状況であった。

栄養教諭による授業が実施されていない低学年について、外部講師に頼ることなく、分かりやすく、楽しく、印象に残る食指導を実施できないだろうかと思い、教材を探していたところ巡り合ったのがネスレ ヘルシーキッズ プログラムだった。

このことにより、6年間を見通した計画的な食指導が充実し、さらには「食事と運動の関連」について、発達の段階に応じた魅力的な教材を用いてより深く学ぶ時間を子どもたちへ提供できるようになったのである。

このプログラムは、担任および児童に好評であった。これは、分かりやすい内容とあらかじめ用意された指導資料と教材があることに起因すると考えられる。

翌2012年は、前年度の評価を参考にし、実施対象を全学年に広げ、6年間の小学校生活の中で、全ての児童が『げんきのもと』→『からだのもと』→『自分のからだは自分でつくる』という流れで、全児童がプログラムを受けられるよう計画し、現在に至っている。

校内でのネスレ ヘルシーキッズ プログラム実施率は高く、全校児童が『げんきのもと』『からだのもと』『自分のからだは自分でつくる』の3つのプログラムを必ず受講する事に関しては100%達成されている。これは、前述の「いのちの授業」の計画によるところが大きい。

本校では、ネスレ ヘルシーキッズ プログラムのねらいを以下のように定めている。

ネスレ ヘルシーキッズ プログラムを取り入れることで、「栄養に関する知識」とともに「運動の大切さ」を関連付けて学び、「自分のからだは自分で守る」態度を育成すること

目的を単に食育に絞るのではなく、「自分のからだは自分で守る」という健康観及び態度の育成へ

広げた。そうすることで、ネスレ ヘルシーキッズ プログラムの内容は前述の「いのちの授業」の目的とも合致し、「食育」と「いのちの授業」の両方の領域でこのプログラムを扱えるようになり実施率が高まったと思われる。

##### 2) 運動プログラムとの連携と工夫

ネスレ ヘルシーキッズ プログラムには「たくさん動いて、しっかり食べて、元気なからだをつくろう」という大きな目標が設定されている。食育を考える時、食べ物に関する知識だけでなく、「栄養(食べること)」と「運動(からだを動かすこと)」を運動させてプログラムを構成している点が、このプログラムの大きな特色である。

《運動(からだを動かすこと)》について、当初はプログラムの中で紹介されている《健康問題解決『ヘルシーキッズ鬼ごっこ』》や《楽しく動こう『鬼ごっこ』》を実施したが、高学年から「面白いけれど、レクリエーションの様になってしまい、遊びの要素が多すぎる。体育的要素を増やせないだろうか。」との意見が寄せられた。そこで、高学年では鬼ごっこではなく、《ヘルシーキッズ プログラム》→《体育》という構成でプログラムを実施した。しかし、この構成では《栄養》について知識で捉える事はできるが、次時に実施するのは通常の体育の授業のため、《栄養》と《運動》を連動して考える事が難しいという事実もあった。

昨年度、ネスレ ヘルシーキッズ プログラムに室内運動『ヘルシーキッズBRTプログラム』が加わった。これは、Balance バランス スピニング(回転運動)・Rhythm リズム ホッピング(連続跳躍運動)・Timing タイミング ジャンケン(瞬発運動)の3つの領域からなるよりトレーニング色の濃いプログラムである。従来から問題となっていた高学年向けの《運動》領域をネスレ ヘルシーキッズ プログラム独自のBRTプログラムに差し替える事で、高学年に合ったプログラムを実施できる見通しがついた。これを、より印象深いものにするため、試験的に5学年を対象に外部講師(スポーツインストラクター)を招聘した授業を実施した。



実施後アンケートの結果、教室での学びと関連付けられた特徴のある運動プログラムをセットにする事で、児童の理解は深まるとともに、授業の内容は記憶に印象深く刻まれている事が分かった。

そこで、『ヘルシーキッズBRTプログラム』導入2年目となる今年度も、昨年同様に実施した。講師は昨年と同じ方をお願いしたため、講師のプログラムに対する理解もより進み、本校児童の実態に合わせて、プログラムの内容をアレンジして下さった。例をあげるなら、「指の数を考えながら行う足じゃんけん」「小さなバランスボールを用いたバランス運動」などである。

昨年同様、実施後アンケートは高評価であり、この取組は次年度以降も継続する予定である。



外部講師を招聘しての授業（初年度）



外部講師を招聘しての授業（今年度）

## 5 まとめ

食育は、内容的に食事の質や栄養、郷土食など「食べ物」の知識に偏りがちな領域である。しかし、食事の大切さと運動の大切さをリンクさせながら一緒に学ぶことにより、「食べ物は健康の維持に不可欠なものである」という認識が深まり、知識だ

けではなく、食べ物を大切にする心や自主的に体を鍛える姿勢が児童の中で育っていくのではないかと考えている。

本校では、低学年からネスレ ヘルシーキッズプログラムに取り組んだ事により、食の大切さや栄養に対する理解が深まり、2学年での給食センター見学や栄養教諭訪問時の食指導の際は、今まで以上に熱心に参加するようになった。また、あらかじめプログラムで得た知識を、6年間を通して様々な場面で繰り返して学ぶことで、より確かな定着も見られる。

さらに、本校では以前からなわとびの取組や中学年以上ではドッジボールの取組がさかんに行われており、児童の運動に対する関心は低いと思われ。「正しい食事」と「体を動かすことの大切さ」をリンクさせた学習を繰り返していく事で、運動が苦手な児童が陸上大会にチャレンジするなど、自主的に運動に取り組む姿が見られるようになってきた。



ドッジボール大会参加の様子

- これらの取組を定着させていくためには、
- ◎指導者側が常に新しい視点と知識を持ち、子どもが意欲的に取り組める学習内容やプログラムを提供していくこと
  - ◎それぞれの伸びを一人一人が自覚できるような手立てと実施後の正しい評価

の大きく2点を重視し、今後のより良いプログラムの実施に努めていくことが重要と考えている。

## ネスレ日本株式会社

自分のからだは自分でつくる

「ネスレ ヘルシーキッズ プログラム」

### 1. 取組の背景

栄養不足による乳幼児の死亡率の高さに心を痛めたアンリ・ネスレが、150年前にスイスで安全で栄養価の高い乳幼児用乳製品を開発し、これを販売するための会社を設立しました。それ以来、社会のために価値を創造し、それによって企業にとっての価値も創造する、「共通価値の創造」の考え方が、ネスレの基本的な経営方針になっています。この方針のもと、世界を代表する栄養・健康・ウェルネス企業に成長してきました。そして、現在「共通価値の創造」が最も見込める領域として、「農業・地域開発」、「水資源」そして「栄養」の3分野を掲げてさまざまな取組を行っています。「ネスレ ヘルシーキッズ プログラム」は栄養の分野における主要な取組の一つとして位置づけられています。

2009年に開催されたCSV（共通価値創造）フォーラムにおいて、ネスレスイス本社のポール・ブルケCEOが、ネスレが事業を展開するすべての国で、世界の最も複雑な課題である子どもの健康問題に取り組むことを考え、「ネスレ ヘルシーキッズ プログラム」を実施することを発表しました。このプログラムは政府やNGO、NPOなどの公的機関と協働して、その国や地域の子どもたちが抱える課題を解決するようなオリジナルのプログラムとして開発されており、子どもたちの栄養に対する知識の理解を促進し、正しい食生活を促す食育プログラムと、十分にからだを動かすことの大切さを学んでもらう運動プログラムをセットにした取組です。2014年には73カ国でネスレ ヘルシーキッズ プログラムが展開され、約760万人の児童に対して支援をしています。



### 2. 日本におけるネスレ ヘルシーキッズ プログラムの考え方

日本では2011年より、一般社団法人ニュートリション運動推進会議 子どもの健康づくり委員会をパートナーに、「自分のからだは自分でつくる」をスローガンに掲げて活動しています。

活動の背景として、心身の成長の基盤である「食べること」や「からだを動かすこと」に対する子どもたちの関心が低く、自分に自信をもって積極的に行動できない子どもが多いと指摘されています。

人間の生きる根幹である「食べる」「動く」「休む」ことの大切さを小学生に伝えることにより「自分のからだは自分でつくる」という自己管理意識と能力が身につく、それによって生涯にわたって健康なからだと望ましい生活習慣を自分のものとし、「自信」が持てる子どもが育つことにつながると考えています。

私たちは、子どもが成長する過程において「からだづくり」に自ら関心を持ち、さらに、仲間とともにその喜びや楽しさを分かち合うことによって、心身豊かに成長することを願い、「ネスレ ヘルシーキッズ憲章」を定めています。

#### ネスレ ヘルシーキッズ憲章

1. 「自分のからだは自分でつくる」という、からだづくりに対して前向きな子どもを育てます。
  - 「巧みに運動する身体能力」
  - 「健康・安全に生きるための身体能力」
  - 「社会生活において必要な身体能力」
2. <<運動>>と<<栄養>>を組み合わせた「からだづくり」に取り組めます。
3. 「社会性」や「対人関係能力」、「他者への思いやり」を育てます。



### 3. 基本の活動

～小学校を対象とした無償教材提供～

食育に使える栄養プログラム教材と、体育や学活で使える運動プログラムの教材をセットにして、無償で提供しています。

#### ●特徴

- 学校が抱える課題や児童の習熟度に合わせて組み合わせられるよう基本教材に加えてテーマ別教材を用意
- 黒板での授業をしやすくするダウンロード教材など、WEB上で教材を用意
- 先生のための「教師用手引き」を用意

#### <<栄養プログラム>>

##### ① 「げんきのもと」

対象学年：1年生、2年生

楽しいイラストで食べることの意味や必要性を学びます。

食育の授業として、学級活動や総合的な学習の時間等、身体測定などの保健指導の時間にご活用いただいています。

##### ② 「からだのもと」

対象学年：3年生、4年生

食べ物のはたらきや栄養バランスを、付録の食料シールを使って楽しく学びます。

3年生の保健領域「毎日の生活と健康」の学習、学級活動や総合的な学習の時間等での食育授業、身体測定などの保健指導の時間にご活用いただいています。

##### ③ 「自分のからだは自分でつくる」

対象学年：4年生、5年生、6年生

丈夫な骨のつくり方と成長期の骨づくりの大切さを学びます。

4年生の保健領域「育ちゆく体とわたし」の学習、学級活動や総合的な学習の時間等での食育授業、給食などの栄養指導、または身体測定などの保健指導の時間にご活用いただいています。

#### <<運動プログラム>>

##### ① ヘルシーキッズ鬼ごっこ

「ヘルシーキッズ鬼ごっこ」は、日本の子どもたちの健康課題を解決するために開発したオリジナルの運動プログラムです。鬼ごっこに食育学習の要素（栄養の3色分類）を取り入れることで、鬼ごっこをしながら栄養と運動によるからだづくりを意識できます。

子どもたちが鬼ごっこを遊びとして楽しむことは、全身を動かし、自然とからだづくりにつながります。同時に鬼ごっこを単なる遊びにとどまらず、基礎的なものから応用までの習得状況に応じた運動プログラムにすることで、身体能力の向上を図ることになります。それとともに、クラスや仲間の状況を考えながらみんなが楽しめるルールを考え、まわりとのコミュニケーション、思いやりなども学ぶことが期待できます。また、栄養プログラムで学んだことを復習するような内容にもなっています。

- ヘルシーキッズじゃんけん鬼
- ヘルシーキッズ問答鬼
- ヘルシーキッズ宝あつめ鬼ごっこ



##### ② ヘルシーキッズBRTプログラム

「ヘルシーキッズBRTプログラム」は、限られたスペースでも、1人や少ない人数でも取り組める、小学生の時期に有効な運動（トレーニング）として開発されました。

「BRT」は「Balance（バランス）」「Rhythm（リズム）」「Timing（タイミング）」の頭文字をとった名称で、これらの要素は学童期における正しい姿勢づくりとからだの動かし方の基礎となります。

「B」「R」「T」それぞれ要素別に段階的な運動が組み込まれています。

- Bバランス：スピニング（回転運動）
- Rリズム：ホッピング（連続跳躍運動）
- Tタイミング：ジャンケン（瞬発運動）



### 4. プログラムの効果検証

ネスレ ヘルシーキッズ プログラムでは、活動が児童にどのような影響を与えているか、モニター校の協力を得て検証を行い、その結果を関連する学会で発表しています。

#### <<福島県田村市立大越小学校>>

2014年4月よりモニター校として4年生が1年間、栄養プログラムと運動プログラムを組み合わせたネスレ ヘルシーキッズ プログラムの活動を実践しました。大越小学校は、東日本大震災の影響による校舎建て替えが行われており、運動を行う場所の確保が難しい状況です。震災後の福島県内の児童の肥満率増加も、保護者の皆さんの心配に繋がっています。こういった背景から、限られたスペースや少人数で取り組める「ヘルシーキッズBRTプログラム」を中心に、「ヘルシーキッズ鬼ごっこ」、栄養プログラムを展開しています。専用機器を使用した子どもたちのからだのバランス測定や、生活習慣・栄養摂取に関するアンケートを解析しています。研究は、キッズアスレティクス・ジャパンの小林敬和先生（中央学院大学教授）、沼澤秀雄先生（立教大学教授）を中心に行っています。

### 5. 教材を利用された小学校の先生の声

実際に教材を利用された小学校の先生からの声をいくつか紹介します。

- ・タイトルの「自分のからだは自分でつくる」は自分の健康を主体的にとらえ、実践することの大切さを伝えるよいメッセージだと思う。（養護教諭）
- ・教材がカラーで見やすく、シールもあり、児童が意欲的に取り組むことができました。学校でのカラー印刷は難しいため、とても助かっています。（養護教諭）
- ・食べ物が3つに分かれていることに興味を持ち、家族に伝えようとしたり、給食を残さず食べようと欠席者の牛乳をおかわりしようとする希望者が増えた。その日の給食と関連づけて指導できると、より効果的だと感じました。（栄養教諭）
- ・指導案もあり、担任としてとても取り組みやすかった。ダウンロード教材も活用でき、授業がすすみやすかった。（3年担任）
- ・ちょっと目先が変わった鬼ごっこ。子どもが興味をもってできてよかった。（養護教諭）
- ・高学年には家庭科の授業、低学年には給食指導の時間中に活用しました。（6年担任）

#### <問い合わせ先>

一般社団法人ニュートリション運動推進会議

子どもの健康づくり委員会

TEL：03-3541-6362

<http://www.ugoku-taberu.com>

第6回ESD大賞  
受賞校実践集

発行日：平成28年3月14日

発行：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

<http://www.jp-esd.org>

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-40

Tel：03-3295-7051

Fax：03-3295-7054

E-mail：info@jp-esd.org